日本語の体験的把握に表れる〈視覚性〉〈感覚・感情性〉〈共感性〉

── 対応する英語表現との対比の観点から ──

尾　野　治　彦

目　次

1　はじめに
2　〈視覚体験〉に関わる表現
2.1　「見える」
2.2　「見ると」と「見て」
2.3　「見える」と対応する英語の使役構文
2.4　「みるみる」と「目の前に」
2.5　「見る」が含まれるその他の表現
2.5.1　「見」を含む動詞の例
2.5.2　「見」が含まれた動詞以外の表現
2.6　尾野 (2012) の視覚体験名詞との関連性
3　〈感覚・感情体験〉〈思考体験〉に関わる表現
3.1　〈感覚・感情体験〉
3.1.1　「～そうに」「～ように」──
3.1.2　オノマトペ
3.1.3　主人公と語り手の〈共通感覚体験〉
3.1.4　〈感情体験〉──「びっくりした」「驚いた」──
3.2　「直接話法」と共に用いられる「伝達動詞」と「感情表現」
3.3　「思う」と「思考体験」
3.4　say「言う」と think「思う」── 野村 (2006) の知見との関連性 ──
4　池上 (2011) の知見との関連性
5　終わりに

1　はじめに

これまで、日本語表現の「体験性」については、尾野（2008a）（2008b）（2011）では、時の推移を表す副詞表現や、「S1と、S2」の文連結に対応する英語表現を論じ、また、尾野（2012）「〈顔〉を表す視覚的体験名詞をめぐって」では、「顔」「表情」「気配」といった「視覚体験名詞」を中心にして、対応する英語表現との対比の観点から日本語の「体験名詞」について論じてきた。

本稿もこれらの研究の延長上に位置されるものであるが、これまでの一連の尾野の研究の概略は次のようなものであった（尾野 2012：3）。

(1)　尾野（2008a，2008b，2011）では、「体験的把握」と「分析的把握」の観点から、事象の推移を表す「S1と、S2」構文と、時の推移を表す「やがて」について、これらの表現は英語にそのまま直訳することはできず、逆に、これらの対応表現のない英語原文が日本語に訳出されるとき、これらの表現が訳語として表れることを論じた。このように、構文であれ、語句であれ、ある日本語表現が英語に訳出されず、逆に、英語原文にはなかった表現が日本語に訳出される場合、本稿では、それらの表現は、「場面内視点」がもたらす、認知主体と記述対象との「身体的インタラクション」による「体験表現」であると名付けたい。「場面内視点」と「場面外視点」による具体的な日英語表現の違いは、中村（2009）において23項目にわたって詳述され、濱田（2011）においても幾つかの具体例が説得的に論じられているが、本稿は、これまで論じられることがなかったと思われる、名詞表現の「体験性」について、特に視覚表現である「顔」を中心に、英語表現との対比の観点から論じるものである。

本稿は、この延長として、日本語は「〈見え〉を体験する範囲で表現する言語である」(尾野 2012：5) との観点から、これまでの拙論ではふれられてこなかった日本語表現の体験性について、対応する英語表現との観点から論じてみたい。なお、本稿でも用いられる「体験表現」という用語の定義については、上の引用に従うことにする。

論の進め方としては、2 節では〈視覚〉、3 節では〈感覚・感情体験〉〈思考体験〉に関わる表現を扱うが、日本語表現の体験性の表れとしての〈視覚性〉〈感覚•感情性〉〈共感性〉は、はっきり区別できるものではなく、それぞれが部分的には重なり合っているものであり、この節による分け方はあくまで便宜的なものである。なお、本稿で論じる内容は、日本語表現一般にあてはまるものであるが、3.2 節での「「直接話法」と共に用いられる「伝達動詞」と「感情表現」」については、特に、絵本•童話というジャンルにおいて、よりあてはまるものであることをお断りしておきたい。

いずれにせよ、結論としては、時の推移の体験を表す「やがて」や「S1と、S2」が英語には訳出されなかったように、本稿で扱う〈視覚〉〈感覚・感情〉〈共感〉に関わる体験表現も、分析的把握の英語においては把握の対象とはならないため、英語では訳出されない傾向にあるということになる。

2　〈視覚体験〉に関わる表現

2.1 「見える」

日本語の体験的な事態把握においては、「視覚」による把握が重要な役割を果たしていることはいうまでもないと思われる。事実、池上・守屋 (2009：47) には、「「事態」は感覚の約 8 割と言われる視覚に拠った比喩的な言い方、すなわち目に映った「見え」にほぼ重なると言うことができる。」との記述がある。また、すでに、尾野 (2012)「〈顔〉を表す

視覚的体験名詞をめぐって」では、〈顔〉を表す様々な表現が日本語では多用されていることもみたが、これも、論文タイトルから明らかなように、〈視覚〉による把握の表れということができる。

「場面内視点」での体験的な事態把握においては、〈視覚〉による把握が最も優位にあるとすれば、「見える」等の視覚に関わる表現が多いことは当然予想できることになる。いくつか、そのような例をみていきたい[1)]。

まず、次の例をみてみよう。

(2) a. 太ったおばさんがいたの。 (本多 2005：157)
　 b. Then I <u>saw</u> a big lady standing there.
(3) a. どの道にも人があふれている。 (本多 2005：159)
　 b. You can't <u>see</u> the streets for people.

(2)(3) は本多 (2005) からの引用であるが、本多 (2005：159) によれば、これらの英文と日本文の違いは、「知覚した事物の見えをそのまま記述した（したがって知覚者および知覚という出来事はエコロジカル・セルフとして捉えるにとどめ、言語表現としてはゼロ形のままにとどめている）のが日本語の例であるのに対して、視座の移動により、知覚者としての自己および知覚という出来事を対象化して視野の中に捉えて明示的に表現しているのが英語の例である」ということになる。

もっとも、本多 (2005：160) は、(3b) は (4) のように、「見える」を用いて、「出来事としての知覚だけを対象化して表現することも可能である」としている。つまり、英語の see に対し、「見える」が表れる場合もあるとしている。

(4)　どの道にも人があふれているのが<u>見える</u>。 (本多 2005：160)

要するに、(2)(3) の例に関する日本語と英語の違いについては、知覚主体と知覚行為がゼロ表現として表れる日本語と、知覚者と知覚行為が表現される英語という表現上の違いという図式で捉えられるということであるが、その一方で、(4) のように、(2)(3) の視覚行為がゼロ表現の事例とは異なって、「見える」が表れる場合もあるということである。

本多は、(4) の日本語の「見える」が表れた表現を、あくまで、(3b) の英語の知覚者と知覚行為が表れた英語表現との関連において捉えているようであるが、本稿で問題にしたいのは、まさにこの点についてである。つまり、(3b) の see と (4) の「見える」を関連づけてよいのだろうかということであり、これは、「見える」をどのように位置づければよいのかという問題でもある。

例えば、次の例をみてみよう。(5)(6) は、「見える」が生じた日本語原文に、英訳として see とその相当表現が表れている場合、(7)(8) は、see が表れた英語原文に、「見える」の日本語訳が表れている場合で、本多のいう、(3b) の英文と (4) の「見える」の日本文のペアに相当する例である。

(5) 近づくにつれ欝蒼と樹々に覆われたこの島の崖に波がぶつかり砕けているのが見える。 (『侍』: 126)

As they drew nearer, they could see the waves beating and breaking against the cliffs of the densely forested island.

(*The Samurai*: 89)

(6) 重兵衛は人を掻きわけて前に出た。すると真先に臼井内蔵助の姿が見えた。 (「三ノ丸広場下城どき」『麦屋町昼さがり』: 147)

He forced his way through the onlookers and caught sight of Vice Concilor Usui Kuranosuke in front of the pack.

(“The Runaway Stallion” *The Bamboo Sword*：231)

(7) When the Little House saw the green grass and heard the birds singing, she didn’t feel sad any more. (*The Little House*：37)
みどりのくさが　みえてきました。とりのうたも　きこえます。ちいさいおうちは、もうすこしも　さびしくありませんでした。
(『ちいさいおうち』：37)

(8) He did see two cameras on the front corners of the building and several cars parked inside the compound.
(*The Black Ice*：279)
ビルの正面の両隅に監視カメラがついており、敷地内にかなりの数の車が駐まっているのが見える。　(『ブラック・アイス』：360)

これらは、表面的には、英語での知覚主体と知覚行為の see を表す表現が、日本語では知覚主体がゼロ形で、知覚行為 see が「見える」に変わっているだけの違いのようにも思えるが、「見える」と see の知覚作用にはきわめて重要な違いがある。例えば、(5) について言うならば、対応英語表現では、過去の時点における主語の知覚を表しただけであるが、日本語原文では、語りの現場における主人公の視覚体験を表していると同時に、語り手の体験を表しているということである。(ちなみに、先の (3) と (4) は、語り手と話し手の違いの区別がつきにくく、see と「見える」の違いが見えにくいものとなっている。)

尾野 (2012：5) では、「日本語は、〈見え〉を体験する範囲で表現する言語である」としたが、これは、日本語が、現場に臨場する「場面内視点」(濱田：2011) の言語であるため、語り手が現場の事象をまずもって視覚体験として捉えるためである。そうであるとすれば、(4)～(8) に表れた「見える」は、(3) と (5)～(8) での see の相当表現としてではなく、これとは無関係に、日本語表現の特徴である事態把握の際の〈視

覚性〉が「見える」という語によって表れたものとして捉えたほうが、この種の表現の本質を捉えたものとなろう[2)]。

例えば、次の例をみてみよう。これらは、「見える」が表れた日本語表現の例であるが、対応する英語表現には、知覚者と知覚行為は何ら表れていない。つまり、これらの例は、表面的には、本多（2005：159）のいう「知覚という出来事はゼロ形のままにとどめているのが日本語の例であるのに対して、……知覚という出来事を対象化して視野の中に捉えて明示的に表現しているのが英語の例である」というのとは全く逆の現象になっているということになる。

(9)　ずっと　おくに、あおじろい　ひかりが　みえてきました。
（『ぐりとぐらのかいすいよく』）

There, at the very end of the crevice, something glows in the dark.　（*Guri and Gura's Seaside Adventure*）

(10)　そとは月あかりで、かなりとおくのものまで見えます。
（『アイヌとキツネ』）

The moon was bright and lit the area for quite a distance.
（*The Ainu and the Fox*）

(11)　薄汚れた窓越しに、埃っぽい風景が見える。　（『凍える牙』：78）

Takizawa was sitting in a window seat, jiggling his leg and staring moodily out the window, beyond which lay a dusty landscape.　（*The Hunter*：44）

(12)　そこは隣町に入ったところで、表通りの真正面に、赤赤と沈みかけている日が見える。　（「踊る手」『夜消える』：117）

He had just entered the district adjoining his own.　Everything was already bathed in the deep orange glow of the setting sun.
（"Dancing Hands", *The Bamboo Sword*：251）

(13)　島村は駒子の立った後の藤椅子に座っていると、スキイ場のはずれの坂道に、きみ子の手を引いて帰る駒子が見えた。

（『雪国』：74）

Shimamura went out to the veranda. Komako was leading Kimi down the steep road below the ski grounds.

（*Snow Country*：76）

(14)　その方角からこちらと同じように侍や徒歩の男たちの群れがゆっくり近づいてくるのが見える。（『沈黙』：160）

; and from that direction there slowly approached a band of samurai and their attendants, similar to the ones here waiting.

（*Silence*：101）

(15)　窓の向こうには雨に濡れる杏の花が見えた。

（『博士の愛した数式』：6）

Outside the window, the blossoms on the apricot tree were heavy with the rain.（*The Housekeeper and the Professor*：2）

(16)　カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのようにうつくしくかがやいて見えました。（『英語で読む銀河鉄道の夜』：86）

Campanella's cheeks glistened with the colour of a ripe apple.

（『英語で読む銀河鉄道の夜』：86）

Campanella' cheeks were aglow with the beautiful red flush of a ripe apple.（*Night Train to the Stars*：35）

もちろん、これらにおいて、「見える」は義務的な表現ではなく、単に体験的把握における視覚性が強調されているにすぎないというべきである。例えば、(11) で、「埃っぽい風景」が「見える」のは、誰にとってかといえば、「場面内視点」からの、ゼロ表示となって表れている現場の語り手にとってである。一方、この個所に相当する英語では、“beyond

which lay a dusty landscape”となっており、そこに、現場の視覚体験は存在していない。この例においては、「薄汚れた窓越しに、埃っぽい風景が続く」や「薄汚れた窓越しは、埃っぽい風景である」というような「見える」が表れない表現ももちろん可能であるが、「見える」という語があえて表現されているのは、現場での「見える」という視覚体験の強調のためと考えられる。

一方、逆に次は、何ら視覚表現が表れていない英語原文の日本語訳に、「見える」が表れている例である。

(17) The fog rolled along the sand bar and out over the water and suddenly Elmer shouted, “There, behind you! Look at the pretty green island!” (*Elmer and the Dragon*：19)
あさせの上のきりが、はれはじめました。そして、あさせのまわりの水が、みえてきました。とつぜん、エルマーは、さけびました。「みえるぞ、うしろがわだ！　ほら、きれいな、ちっちゃな、みどりの島がみえるだろ！」 (『エルマーとりゅう』：33)

(18) Outside, the lights of towns and villages flickered in the distance as the Polar Express raced northwards.
(*The Polar Express*)
窓の外に目をやると、遠くの町や村の明かりがちかちかとまたたくのが見えた。急行「北極号」は一路北へとひた走っていた。
(『急行「北極号」』)

(19) ...and now at night the lights of the city seemed brighter and closer. (*The Little House*：12)
……よるになると、まちのあかりが　まえよりも　ちかく、またおおきく　みえはじめました。 (『ちいさいおうち』：12)

(20) Jerome Patterton and Roscoe Heyward were there, grim

faced. (*The Money Changers*：200)

ジェローム・パタートンとロスコー・ヘイワードの渋い顔が見えていた。 (『マネーチェンジャーズ（上）』：291)

(21) ; there were even a few smiles among those waiting as increasing amounts of money continued to appear.

(*The Money Changers*：418)

目の前にあとからあとから金が積み上げられるのを見て、行列の中には笑顔さえちらほら見えはじめた。

(『マネーチェンジャーズ（下）』：254)

(22) Miss Troy sat rocking quietly in one of them as I pulled into the drive. (*Breakheart Hill*：77)

ドライヴウェイに車を入れたとき、そのうちのひとつに腰をかけて、静かに椅子を揺らしているシャーリー・トロイの姿が見えた。 (『夏草の記憶』：112)

(23) To the north the power station was a glittering galaxy of white lights, its stark geometric bulk subsumed in the blue-black of the sky. (*Devices and Desires*：102)

北の原子力発電所のくっきりした幾何学な巨体が、濃紺の空に包み込まれて、白い照明の瞬く銀河に見える。

(『策謀と欲望（上）』：142)

(24) ...she squinted her eyes and bent her lips in a tough tiny smile that advanced her age immeasurably.

(*Breakfast at Tiffany's*：119)

……彼女はすこし斜視の眼を細め、唇を曲げて、小さな固い微笑をうかべたが、その顔がなんだかとても老けて見えた。

(『ティファニーで朝食を』：139)

これらの英語原文には、「見る」に相当する英語は何ら含まれていないが、日本語訳で「見える」が用いられているのは、視覚による事態把握を示すものとしてよいであろう[3)]。

つまり、「見える」は、体験的な事態把握において、語り手自らの視覚体験そのものを表すマーカーともいうべき表現であって、よって、英語には訳出されず、逆に、英語原文での事象が、視覚体験的に把握されると、「見える」が表れる場合があるということになる。

2.2 「見ると」と「見て」

日本語の視覚体験的な表現における、視覚性の表れは、「見える」だけではない。「見ると」「見て」についても、同じようなことが言えると思われる。

まずは、英語表現に知覚主体と知覚行為が表れ、対応日本語表現にも「見ると」が表れている例である。

(25) 答えがないので、みると織枝は軽い寝息を立てている。

(「一顆の瓜」『冤罪』：299)

Oriye made no reply. When he looked at her, he saw that she had fallen asleep.

(“All for a Melon” *The Bamboo Sword*：77)

(26) He laid down his book. She saw that it was one he and his wife had chosen the previous Friday from the travelling library, the newest H. R. F. Keating.

(*Devices and Desires*：463)

コプリー氏は本を下に置いた。見ると、それは先週の金曜日に夫婦が巡回図書館で選んだ本、H.R.F. キーティングの最新作だった。

(『策謀と欲望（下）』：284)

この場合においても、英語の look at、see は知覚主体の知覚行為のみを表しているのに対し、「見ると」は、知覚主体と語り手の現場での視覚体験を表しているのである。see と「見ると」は、いわば、次元の異なる働きなのである。もっとも、これらの例においても、「見ると」の表現は義務的に必要というわけではなく、あくまで「視覚性」の強調ということになろう。

次の (27) (28) は、日本語原文に「見ると」があるのに、英訳には視覚表現は表れていない例、逆に、(29) (30) では、英語原文に視覚表現がないのに、日本語訳では、「見ると」が表れている例である。

(27) ゆうだちのように、おゆがふってきた。みると、くじらだ。かばのからだについていたあわが、どんどんきえて、ながれていく。

(『おふろだいすき』)

Thanks to his shower all the bubbles on the hippopotamus' body and mine were gone in no time.

(*I Love to Take a Bath*：26)

(28) よく見ると、その向うの杉林の前には、数知れぬ蜻蛉の群れが流れていた。たんぽぽの綿毛が飛んでいるようだった。

(『雪国』：86)

In front of the cedar grove opposite, dragonflies were bobbing about in countless swarms, like dandelion floss in the wind.

(*Snow Country*：90)

(29) Elmer was disappointed. (*Elmer and the Dragon*：38)

エルマーは、王さまをみると、がっかりしました。

(『エルマーとりゅう』：66)

(30) "My dear little girl, you mustn't cry like this," she said, genuinely disturbed by Anne's tragic face.

（*Anne of Green Gables*：178）

「いい子だから、そんなに泣いちゃいけないことよ」アラン夫人はアンの悲劇的な顔を見ると、しんからびっくりしてしまった。

（『赤毛のアン』：308）

これらの日本語の「見ると」は、現場の知覚主体と一体化した語り手が現場の状況にコミットした視覚体験が表されており、英語には訳出されないということになる。

「見て」も、語りの現場で、視覚体験を示す表現と考えられる。

(31) 三原は目次を見て、ページを開けた。（『点と線』：146）

Mihara turned to the index. （*Points and Lines*：90）

(32) 霞ににじんだ部落の明りを右に見て、まっすぐ進めば、ほぼそのあたりに出る見当である。（『砂の女』：204）

If he went straight ahead, keeping the mist-shrouded lights of the village on his right, he could expect to come out just about where the cliffs stopped. （*The Woman in the Dunes*：184）

(33) By evening they had explained everything, and they fell asleep smiling at the stars. （*Farfallina & Marcel*）

あたりが　くらくなるころには　これまでおこったことを、ふたりですっかり　話しあっていました。空の星を見て、にこにこしているうちに　ねむってしまいました。

（『ファルファリーナとマルセル』）

(34) For a moment, as Trent's expression hardened, he wondered if he had gone too far. （*Hotel*：66）

トレントの表情が一瞬こわばったのを見て、ロイスは少しいいすぎたかなと思った。（『ホテル（上）』：100）

これらにおいても、対応英語表現に視覚性に関わる表現はない。

2.3 「見える」と対応する英語の使役構文

英語の使役構文と日本語の視覚体験構文が対応する場合がある。

次の (35) は、日本語原文においては、〈見え〉の対象として捉えられた視覚体験構文であるが、英訳では、知覚としては把握できない〈見えない〉使役構文として訳出され、逆に、(36) は、英語原文の使役構文が、日本語訳においては、「様子を見て」と〈見える〉視覚体験構文として捉え直されている興味深い例である。

(35) そして夕日はまともに二ノ丸の梢を照らしていた。そのために梢の葉は光りかがやいて見える。

(「三ノ丸広場下城どき」『麦屋町昼下がり』: 145)

The sun hitting the branches of the pine trees in the inner bailey made the pine needles shimmer.

(“The Runaway Stallion” *The Bamboo Sword*: 230)

(36) However, the hotel owner's obvious preoccupation made him decide against it. (*Hotel*: 292)

しかし、なにか考えごとにふけっているトレントの様子を見てとりやめたのだった。 (『ホテル (下)』: 149)

今度は、次の例をみてみよう。

(37) The sight of Miles Eastin in court depressed Edwina.

(*The Money Changers*: 154)

法廷に現われたマイルズ・イースティンを見て、エドウィナは悲しい気持になった。 (『マネーチェンジャーズ (上)』: 228)

(37) の英文は、モノがモノへの〈働きかけ〉として分析されたSVO構文で、〈見え〉の対象としては捉えられていないが、この日本語訳では、「法廷に現われたマイルズ・イースティン」は、エドウィナの〈見え〉として捉えられており、「悲しい気持ち」は、エドウィナと語り手の心的体験を表している。

次も同じような例である。

(38) The idea of the pompous Dr. Aarons being attended by an equally pompous nurse amused her. (*Hotel*：79)
まるまると肥ったアーロンズ医師が、負けず劣らずに肥った看護婦をそばに仕えさせている光景が、目に見えるようだ。
(『ホテル (上)』：119)

(38) の英語原文と日本語訳の対比は興味深い。原文の“The idea ... amused her”という他動詞構文の主語の抽象的な“the idea”が、日本語訳では視覚的な「光景」と捉え直され、さらには、原文の他動性構文までもが、「目に見えるようだ」と「目に見える範囲」での視覚体験構文として捉え直されているのである。

2.4 「みるみる」と「目の前に」

「みるみる」や「目の前に」も、視覚による事態把握がはっきり表れている表現である。

まず、「みるみる」が日本語原文で用いられている例をみてみよう。

(39) 不意に木立がざわめき、見る見るあたりが暗くなった。
(『博士の愛した数式』：213)
The trees suddenly began to tremble and the sky grew dark.

（*The Housekeeper and Professor*：137）

(40)　みるみる朝の気温が、本格的な暑さになり、……

（『砂の女』：140）

Gradually the morning temperature attained its usual intensity; ....　（*The Woman in the Dunes*：125-126）

(41)　みるみるカーブが信夫に迫ってくる。　（『塩狩峠』：328）

The curve pressed closer.　（*Shiokari Pass*：260）

対応英語表現では、視覚によって得られた情報であることは示されていない。

今度は、日本語訳に「みるみる」が用いられた例をみてみよう。

(42)　Soon the whole town was flooded.　The Whale was afloat.

（*Whale*）

みるみる　そこらじゅうが　みずびたしになり、くじらは　ぷかりと　うきました。　（『くじらのうた』）

(43)　The snow gets deeper and deeper.　（*Snow is Falling*：6）

みるみるうちに　ゆきが　つもっていく。　（『あっ！ゆきだ』：4）

(44)　Warren Trent's face reddened with anger.　（*Hotel*：278）

トレントの顔が、みるみるうちに怒りの色に染まった。

（『ホテル（下）』：128）

「みるみる」は、語りの現場での事態把握の視覚性がはっきり表れた表現であり、現場でのリアルで眼前的な視覚体験がよく表れているが、この「みるみる」の眼前的な視覚体験性は、分析的把握の英語には表れ得ない。

次に「目の前に」をみてみよう。

(45)　めのまえが、ぱあっと　あかるくなりました。

(『いもうとの入院』：14)

Suddenly, it became quite bright. (*Naomi's Special Gift*：14)

(46)　いきなり、部落の全景が、目の前にあったのだ！

(『砂の女』：215)

Suddenly the village lay before him.

(*The Woman in the Dunes*：193)

次は、日本語訳に「目の前」が現れた例である。

(47)　Above them rose a cliff, and green vines hung over the edge, making a pool of shade.　(*Elmer and the Dragon*：22)

すぐ目のまえに、たかいがけが、そびえていて、その上から、みどりのつるくさがたれさがっていました。

(『エルマーとりゅう』：40)

(48)　Ahead of him was a very long tunnel.

(*Badger's Parting Gifts*)

目の前には、どこまでもつづく長いトンネル。

(『わすれられないおくりもの』)

これらの「目」が含まれた表現においても、現場における「知覚主体」にとっての視覚性が強調されるところから、描写の「眼前性」というリアルな視覚性が感じられる。一方、対応する英語原文においては、before、ahead of 等の表現は、あくまで、客観的な基準であって、「目のまえ」のような、語り手と主人公の、語りの場での視覚体験を表すものではない。また、(45) の英訳では、そのような意味合いすらない。

2.5 「見る」が含まれるその他の表現

日本語には、「見る」を含む表現が多数あるが、このことは、日本語の事態把握における視覚の優位性を考慮すれば、十分に理解できることである。

ただ、本節で扱う表現は、語句としては、「見える」や「みるみる」のように、対応英語表現に表れないものではなく、その対応英語表現が存在するものであるので、よって、本稿での考察対象からは除外されるべきものとも考えられる。しかし、対応英語表現に〈視覚体験性〉の意味合いは含まれていないという点において、本節で取り上げることにする。

2.5.1 「見」を含む動詞の例

動詞の例としては、「見」を含んだいくつかの複合動詞がある。以下、いくつか見ていくことにする。

まずは、「見抜く」に対応する英語表現の例である。

(49) そして主はそんな私の心を見ぬかれ、罰し給うたのだろうか。
(『侍』：329)

Did the Lord discern the feelings of my heart and punish me for them? (*The Samurai*：214)

(50) 総督の本心がこの厄介な日本の使者をメヒコの町から遠ざけたいのを見ぬいて私は誘い水をかけた。 (『侍』：148)

Realizing that what the Viceroy really wanted was to get these bothersome Japanese envoys far away from Mexico City, I poured a little priming water into the pump.
(*The Samurai*：103)

(51) Despite their innocence, he had an absurd notion they had

penetrated to the truth. (*Hotel*：274)

ドドのまなざしはいつものように無邪気だったが、オキーフェは心の底を見抜かれたような、うしろめたさを感じた。

(『ホテル (下)』：123)

(52) As if reading his mind, Big George chuckled.

(*The Money Changers*：236)

彼の心中を見抜いたかのように、ビッグ・ジョージが声をたてて笑った。 (『マネーチェンジャーズ (上)』：348)

「見抜く」が視覚的なものであるのに対し、これらの対応英語表現では、discern、realize、penetrate to the truth、read one's mind といった、認識的な表現になっていることが注目される。

次は、「見て取る」と対応英語表現の例である。

(53) 音道を見ると、彼女は犬の声に気をひかれている様子で、いかにも覗いて見たいという雰囲気がありありと見て取れた。

(『凍える牙』：273)

He looked at Otomichi, who seemed bizarrely warmed by the barking; the desire to go see the dogs was written all over her.

(*The Hunter*：145)

(54) 私はナオミが今すぐ荷物を運ぶと云うのを一種の威嚇と見て取ったので……

(『痴人の愛』：275)

I spoke sharply because I interpreted Naomi's "right away" as a threat and wasn't about to give in. (*Naomi*：171)

(55) When I gave no response to this, Lonnie added, ...

(*Into the Web*：156)

ぼくがなんとも答えないのを見て取ると、ロニーはつづけた。

（『蜘蛛の巣のなかへ』：207）

(56) The discovery, and the evident confusion which the cripple showed, made the inspector realize that the matter was serious. （“The Man with the Twisted Lip” *The Adventures of Sherlock Holmes*：158）

この積木が現われたのと、そのとき躄が明らかに狼狽の色を見せたので、警部もこいつは何か深い事情があると見てとった。

（「唇の捩れた男」『シャーロック・ホームズの冒険』：185）

「見てとる」には、視覚によって得た情報の意味合いが含まれているが、対応英語表現には、そのような意味合いは含まれていない。(56) の英語原文は、made が用いられた使役構文となっている。

次は、「見とれる」である。この語には、「視覚」によって「感嘆」といった感情的なニュアンスが引き起こされたニュアンスがあるが、対応英語表現には、そのようなニュアンスはない。また、(57) では、この箇所は英訳されていない。

(57) ぼくたちが、シャボンだまに　みとれていると、オットセイは、そのうちのひとつを、はなのあたまにのせて、くるくるまわしはじめた。（『おふろだいすき』）

As the seal began spinning one of the bubbles on the tip of his nose, and while he spun, the bubble began to grow.

（*I Love to Take a Bath*：16）

(58) 島村は驚くばかりあざやかな赤い色に見とれて、「頬っぺたが真赤じゃないか、寒くて。」（『雪国』：46）

His eye was fastened on that extraordinarily bright red. “Your cheeks are flaming.　That’s how cold it is.”

（*Snow Country*：47）

(59) George was fascinated. （*Curious George Takes a Job*：23）
じょうじは、うっとり　みとれました。（『ひとまねこざる』：23）

(60) “He must be some friend,” Sarah said, admiring the built-in refrigerator. （*Without Remorse*：40）
「並みの友人じゃなさそうだ」サムが作り付けの冷蔵庫に見とれながらいった。（『容赦なく（上）』：63）

この種の「見」を含んだ動詞の数は、限りないともいえるものであるが、以下、いくつか、例を追加しておきたい。

(61) 立花が嘘をついているのかどうか、竹村には見極めることができなかった。（『戸隠伝説殺人事件』：263）
Takemura could not tell whether he was lying or not.
（*The Togakushi Legend Murders*：212）

(62) 彼は素早く二人の表情を見くらべ、答えを探った。（『侍』：26）
Quickly he studied the expressions on both men’s faces and groped for a response. （*The Samurai*：23）

(63) 一同が静かに眠っているのを見定めると、彼はまた足音を忍ばせて立ち去っていった。（『侍』：170）
After determining that all were sleeping peacefully, he slipped softly away. （*The Samurai*：116）

(64) 私は若いインディオの青年の死を見棄てることができなかったように、この田中の死を見放すことはできなかった。（『侍』：327）
Just as I had not been able to abandon the young man to death, I could not forsake Tanaka in death. （*The Samurai*：213）

(65) 長谷倉はそれらの始末を見届けてから私にたずねた。

（『侍』：327）

Hasekura observed the proceedings and then spoke to me.

（*The Samurai*：213）

(66) Traffic was held up for hours as they slowly moved her out of the city. （*The Little House*：34）

じどうしゃや　つうこうにんは　とまって、ちいさいおうちがゆっくり　うごいていくのを　みおくりました。

（『ちいさいおうち』：34）

(67) All around him rose beautiful tall pine trees standing in rows, ... （*Elmer and the Dragon*：25）

あたりをみまわすと、きれいな、せのたかい、まつの木が、ぎょうぎよくならんではえています。　（『エルマーとりゅう』：45）

(68) A blight seemed to have descended on her.

（*Anne of Green Gables*：44）

何かの不幸に見舞われたらしいようすだった。

（『赤毛のアン』：78）

これまで述べてきた「見る」が含まれた日本語表現と対応英語表現を比べると、「見る」が含まれた表現には、「見る」主体が、現場の知覚主体の直接的な視覚体験で、事態把握をしたという視覚体験性のニュアンスが感じられるということである。一方、対応英語表現は、現場の知覚主体の視覚による事態把握のニュアンスが全く排除され、事態そのものが客観的に描かれているというニュアンスである。

次の「見せる」も視覚体験性を表す語といえよう。

(69) くるりくらが、「いち　に　さん　し」と、たいそうをしてみせると、……　（『ぐりとぐらとくるりくら』：27）

"One, two, three.　One, two, three..." sings Bunny Buna.

（*Guri and Gura's Magical Friend*：27）

(70)　田中もいつもの仏頂面をやめて西に笑顔をみせた。（『侍』：273）

Tanaka's customarily glum expression was gone, and he smiled at Nishi.　（*The Samurai*：179）

(71)　待子は、きまり悪そうな微笑を見せた。　（『塩狩峠』：161）

Machiko's expression indicated that for her the matter was decided.　（*Shiokari Pass*：124）

(72)　"Oh, that," He grinned rather scornfully.

（*Breafast at Tiffany's*：94）

「ああ、そのことですか」　彼はさげすむように白い歯を見せた。

（『ティファニーで朝食を』：112）

(73)　"You've been crying," remarked Josie, with aggravating pity.

（*Anne of Green Gables*：281）

「あんたは泣いてたのね」　ジョシーは、しゃくにさわるような同情ぶりを見せた。　（『赤毛のアン』：478）

(74)　Pam held her arms aloft and executed something like a pirouette.　（*Without Remorse*：29）

パムは両手を上げて、ダンスの爪先旋回のようなことをして見せた。　（『容赦なく（上）』：46-47）

2.5.2 「見」が含まれた動詞以外の表現

「見」が含まれた表現として、形容詞や副詞・名詞として使用されている数多くの例があるが、いくつか例を見てみたい。

(75)　ぐるんぱは、みちがえるほど　りっぱになりました。

（『ぐるんぱのようちえん』：9）

Groompa was soon sparkling clean.

（*Groompa's Kindergarten*：9）

(76) 視線を巡らせると、ほとんど正面に近い席で、顔見知りらしい捜査員と並んで座っている滝沢が目に付いた。（『凍える牙』：141）

..., Takako looked around, and her eyes fell on Takizawa, sitting almost directly across the table from her, among officers he was evidently on good terms with.（*The Hunter*：78）

(77) ぎょっとなって振り返ると、もう少しで自分の顔とくっつきそうな距離に、見知らぬ顔があった。（『凍える牙』：149）

Startled, she spun around, almost bumping into the face of a stranger pressed up close.（*The Hunter*：82）

(78) そして、見覚えのある顔を認めると、ゆっくりと手を握り返してくる。（『凍える牙』：393）

When he recognized their faces, he slowly squeezed Takako's hand.（*The Hunter*：207）

(79) strange fish, pulled by an invisible thread...（*Swimmy*）

みたこともない　さかなたち、みえない　いとで　ひっぱられてる……（『スイミー』）

(80) ……見るかげもなくなったレストランの、……

（『凍える牙』：37）

... in the restaurant now destroyed beyond recognition, ...

（*The Hunter*：23）

(81) In the joy of seeing a familiar face...

（*Anne of Green Gables*：281）

見なれた顔をみたうれしさに、……（『赤毛のアン』：477）

(82) Her clothes were clearly well used...（*Without Remorse*：10）

服は見るからに着古しで、……（『容赦なく（上）』：19）

これらの例で興味深いことは、(76) の「顔見知り」や (77) の「見知らぬ」という表現においても、日本語では、「知る」という認識行為が、認識主体の「見る」という視覚体験に基づくものであることを示しているということである。ちなみに、「見知らぬ人」に相当する英語の stranger の意味は、“someone that you do not know”（*Macmillan English Dictionary* 2002：1393）で、「見る」の持つ視覚体験的な意味合いは含まれていないことが注目される。ちなみに、(79) の strange も「みたこともない」、(81) の familiar も「見なれた」と和訳されている。また、(80) では、「見るかげもない」の視覚的表現が、beyond recognition と認識的な表現に英訳されていることが注目される。これらは、日本語における認知行為が、視覚に基づくものであることを示すものといえる。

結局のところ、日本語表現における豊富な「見る」表現は、「場面内視点」での現場の事態把握での視覚体験に基づくものと考えられる。

以下のような名詞表現も、ここに付け加えておきたい。

(83) 長谷倉六右衛門は侍というよりは百姓といったほうが良い男で、使者たちのなかでは見ばえがしない。（『侍』：80）
Hasekura Rokuemon appears to be more a peasant than a samurai, and is the least impressive of all the envoys.
（*The Samurai*：59）

(84) 不満の召出衆たちすべてへの見せしめのためだ。（『侍』：88）
This is a warning to all the discontented lance-corporals.
（*The Samurai*：64）

(85) おそらく東京駅員も、この四分間の見とおしがあることに気がつくものは少ないでしょう。（『点と線』：234）
There can be few, if any, railroad men at Tokyo Station aware of this brief interval.（*Points and Lines*：146）

(86) Though no one knew it, it was the last time he would be present at the bank. (*The Money Changers*：8)
これが銀行での彼の姿の見おさめになろうとは、だれ一人知る由もなかった。 (『マネーチェンジャーズ (上)』：13)

「見る」を含む表現には、これ以外にも、「夢を見る」「見当をつける」「見回す」「見渡す」「見上げる」「見下ろす」「見くびる」「見分ける」「見守る」「見逃す」「見込み」「見失う」「見間違う」「見直す」「目を見張る」といった、「見る」が含まれたおびただしい表現がある。

これらの「見る」表現の多様さは、日本語の事態把握の根底に視覚があることに起因していると考えられる。また、「見ることは体験することである」とすれば、これらの「見る」表現は、日本語表現の根底にある視覚体験志向の表れであるということもできよう[4)]。

池上 (2011：61) は、「日本語の語彙の語義の成立には、〈身体性〉に関わる要因が重要な形で取り込まれていることが確認できる」としているが、これまで論じてきた、「見る」が関わる多くの語彙からは、「日本語の「語彙」には、〈視覚性〉が関わっていることを示す多くの「語彙」が見出せる」ともいえるかもしれない。

2.6 尾野 (2012) の視覚体験名詞との関連性

視覚による事態把握が一般的であれば、視覚にとって注目をあびることになると思われる、〈顔〉に係る表現 (「顔」「表情」「面」「色」等) が、日本語においては、英語に比べ、よく用いられることになることは、すでに尾野 (2012) で示した通りである。

なお、尾野 (2012) では、視覚対象に係る以外の「気配」「調子」「気持ち」「気分」等の「体験名詞」についても扱っているが、これらも「見る」の目的語となりうる例として、以下の例をあげている。

(87) 母親の方が、かなり弱っている様子に見えた。

(「驟り雨」『驟り雨』：139)

..., and the mother was obviously very weak.

(“A Passing Shower” *The Bamboo Sword*：54)

(88) 和田の方は、まるで潮干狩りでもしているような雰囲気に見える。 (『凍える牙』：45)

Wada’s getup reminded Takizawa of a clam-digger.

(*The Hunter*：27)

(89) 外には、まだ朝の気配さえ漂っていないように見えた。

(『凍える牙』：320)

There was still no sign of morning. (*The Hunter*：169)

(90) There was seldom any hedging. (*The Money Changers*：321)

責任を回避するような曖昧な調子はめったに見られなかった。

(『マネーチェンジャーズ (下)』：105)

(91) ハルはいよいよ口が固くなってきた。竹村に早く帰ってもらいたい気持ちがありありと見て取れる。 (『戸隠伝説殺人事件』：306)

This time she clammed up for good, obviously anxious for him to leave. (*The Togakushi Legend Murders*：242)

(92) 本部に戻ってきても、とても以前のように肩肘を張って自分で報告書を書く気分にもならないと見える。 (『凍える牙』：299)

Back at headquarters, there was none of his old arrogant insistence on writing up the reports himself.

(*The Hunter*：158)

尾野 (2012：37) は、これらの例について、「これらの「体験名詞」で興味深いことは、「様子」は見る対象として捉えられ、「見える」が用いられるのは当然として、感覚として捉えられるべきである「雰囲気」「気

配」といった他の「体験名詞」の場合も、……「見える」の把握対象となり得ているということである」と述べているが、これは、「見える」が、単なる知覚行為だけではなく、いわば、〈見え〉の視覚的な事態把握を表す語として用いられていることを示しているといえよう。

また、尾野（2012：38-39）では、「これまで論じられてきた「体験名詞」の使用は、結局のところ、語りの現場での〈見え〉に対する語り手の体験を表わしたものと言える。これらの名詞の使用が、「やがて」や「S1と、S2」「そうな」「ような」といった体験表現と同様、コンテクストの共感性に貢献していることは言うまでもない。読者が共感するのは、分析的、抽象的なものに対してではなく、あくまで語り手の主観的、体験的な要素に対してであるからである。日本語は、主観的な言語であるとは、つとに、指摘されてきたことではあるが、これまで論じられてきた「体験名詞」も、日本語表現の「体験性」という大きな枠組みの中に、位置付けられるべきであるように思われる」とも述べられている。

3　〈感覚・感情体験〉〈思考体験〉に関わる表現

これまで、2節では、〈視覚体験〉に関わる表現について、対応英語表現には、全く、日本語の〈視覚体験〉表現が表れないか、あるいは、対応表現があるとしても、その〈視覚性〉については、表れていない事例について見てきた。

池上（2004：23）は〈体験〉について、「〈体験〉とは、発話の主体が直接自らの身体において事態を感知し、経験しているということ、そしてそれに誘発される形で何らかの気持ち、感情、想いが心に浮かんでくることまでを含むものとする」としているが、「事態の感知」は、主に〈視覚〉等の知覚的な事態把握によってなされることは、すでに2節で見た通りである。本節では、それによって誘発される何らかの気持ち、感

情、想いといった、〈感覚・感情体験〉〈思考体験〉について扱う。

なお、〈感覚•感情体験〉であれ、〈思考体験〉であれ、これらは、どちらも、語り手の物語りの主人公に対する〈共感〉を表しており、この観点からすれば、どちらも〈共感体験〉であるともいえる。この点においては、〈感覚・感情体験〉と〈思考体験〉の区別は、あくまで便宜的なものであることをお断りしておきたい。(もっとも、この点においては、〈視覚体験〉にも、語り手の主人公への〈共感体験〉が含まれていることはいうまでもない[5)]。)

以下、本節では、「〜そうな」「〜ような」「オノマトペ」、「ゆかいな」「げんきに」といった〈感覚体験〉、「びっくりした」「驚いた」の〈感情体験〉、「思う」の〈思考体験〉等についてみてみたい。

3.1 〈感覚・感情体験〉

3.1.1 「〜そうに」「〜ように」——

「そうに」であれ、「ように」であれ、これらの語が何を表すのかについては、おびただしいほどの文献があるが、ここでは、森田 (1986) の説を紹介しておくにとどめたい。

まず、「そうな」についてであるが、森田 (1986：592-593) では、「対象から受ける印象である。その対象が現在示している特徴的な様態から受ける視覚的な状態判断である」としている。ここでの「対象からうける印象」とは、あくまで、現場の場面での語り手の〈印象・感覚体験〉ともいうべきものである。

次の例をみてみよう。

(93)　のっぽくんが　<u>とくいそうに</u>　いいました。

(『しょうぼうじどうしゃ　じぷた』：5)

Lanky said <u>proudly</u>, ...　(*Jeeper the Fire Engine*：5)

(94) “My stomach’s out of water again,” announced the dragon cheerfully. (*Elmer and the Dragon*：16)
「ぼくのおなかが、また、水の上にでたあ。」と、りゅうが、うれしそうにいいました。 (『エルマーとりゅう』：31-32)

これらの例では、単に英語の副詞や形容詞が「～そうに」に置き換えられただけのようにも思えるが、例えば、proudly と「とくいそうに」については、proudly は事実として客観的に述べたものであるが、「とくいそうに」では、語り手の現場での印象や感覚として述べているという違いがあり、この語り手の印象の体験的意味合いを表す「～そうに」は、英語では表れていないとすべきである。

しかし、そもそも、「～そうに」に対応する英語表現が全く表れていない場合がある。

次の例をみてみよう。

(95) じっさい、衣類の端は寒そうに動いていた。が、動いているのはそれと、髪の毛ぐらいなものであった。 (『点と線』：23)
The loose ends of the wrappings that covered them fluttered in the wind; they were the only things that moved—they, and the long hair. (*Points and Lines*：18)

(96) 空は青く晴れ、帆は満足そうに膨れ、…… (『沈黙』：32)
The sky was clear and blue; the sail bellied out in the wind; (*Silence*：23)

(97) Then he padded over to the story corner and went to sleep. (*Library Lion*)
それから、えほんのへやで、きもちよさそうに　ねてしまいました。 (『としょかんライオン』)

(98) “I’m on my way home to the great high mountains of Blueland!” he shouted to the evening skies.

（*The Dragons of Blueland*：1）

「さあ、ぼくは、たかい山にかこまれた『そらいろこうげん』――ぼくのうちへかえるんだ！」りゅうは、夜空にむかって、うれしそうにさけびました。　（『エルマーと 16 ぴきのりゅう』：11）

(95) の「寒そうに」、(96) の「満足そうに」は、英訳では全く無視され、また、逆のパターンである (97) (98) においては、英語原文にない、「きもちよさそうに」「うれしそうに」が新たに付け加えられているが、これは、主人公と一体化した語り手の気持ちが表れたものといえる。この語り手の感覚は、まさに、語りの現場でわき起こった感覚で、まさに、「感覚体験」ともいえるものである[6]。

次は、「ような」の例である。「ようだ」について、森田 (1986：592-593) では、「視覚的印象ではなくて、感覚的に催す気分」であるとしている。

次の例をみてみよう。「ような」も「そうな」のように、一見、対応表現があると思える場合がある。

(99) 雪の粉が、しぶきのように飛び散って小さい虹がすっと映るのでした。　（『手ぶくろを買いに』：6）

..., it flew in a spray all around him, quietly making a small rainbow.　（*Buying Mittens*：7）

(100) Now the Sun was setting and the sky was red as blood and fire.　（*The Lying Carpet*：64）

太陽はしずみはじめ、空は血のように赤くもえていました。

（『ほらふきじゅうたん』：64）

とはいえ、これらの例においても、「ように」が表す語りの現場での印象的体験性は、対応英語表現では、表現されていないというべきである。

しかし、「〜そうに」の場合と同じように、そもそも「〜ように」に対応する英語表現が存在しない場合がある。

(101) ……あせがたきのように流れおちています。

(『スーホの白い馬』：37)

Sweat was pouring from him, ... (*Suho's White Horse*)

(102) ……追いたてられるように家路を急ぐ人々の群れは、全体に灰色で活気もない。 (『凍える牙』：5)

..., but the herd of commuters now hurrying home looked gray and spiritless. (*The Hunter*：5)

(103) Kate scratched her head. (*The Best Present*)

ケイトはこまったように頭をかきました。

(『いちばんすてきなプレゼント』：7)

(104) At length the Duchess of Croydon said, "When do you propose to leave? When will you drive the car north?" (*Hotel*：179)

しかし、彼女はやがて意を決したようにして問いかけた。「で、あなたはいつ出発する考えなの。いつあの車を運転して北へ行ってくれるの」 (『ホテル（上）』：266)

「困ったように」は印象、感覚を語っているのに対し、英語では scratch her head と主語の内面を表さない観察可能な外面的な事態を表す語であることが注目される。

結局、これらの「ような」「そうな」は、あくまで、語り手の、事態把握の際における〈見え〉の体験の表れで、英訳され得ないものであり、

逆に、英語原文の日本語訳では、事象が体験的に把握され、原文にはなかった語り手に沸き起こった印象的感覚が「ような」「そうな」と共に表れているといえる。

3.1.2　オノマトペ

オノマトペは、語り手が、始原的な身体感覚で、語り手の現場で進行する事象そのものの〈見え〉の体験を表したものである。つまり、語り手自身の身体感覚が表現されているのである。一方、対応英語表現では、これらの語り手の体感は表しようもない。

例は、無尽蔵ともいえるほどにあるが、いくつかみておきたい。まずは、日本語原文にオノマトペが使われている例である。

(105)　「ぴん・ぽーん」みほちゃんは、どきっとしました。
(『はじめてのおるすばん』：21)
"Ding—dong!" Meg jumped.　(*Ding-Dong!*：20)

(106)　ねずみの　おいしゃさまは、どんどん　あなの　なかへ、はいっていきました。　(『ねずみのおいしゃさま』：12)
Doctor Mouse went in the entrance hole. Deep inside the home, a family of frogs was asleep.
(*Dr. Mouse's Mission*：12)

(107)　だんだん　くらくなってきました。　(『こんとあき』：34)
By now, it was getting dark.
(*Amy and Ken Visit Grandma*：34)

(108)　昨夜のうちに、真白な雪がどっさり降ったのです。
(『手ぶくろを買いに』：4)
A perfect white snow had fallen during the night, ...
(*Buying Mittens*：5)

(105) の「どきっ」は、主人公の内面を体験的に語ったオノマトペであるが、対応英語表現は、“jumped”という身体の移動を客観的に述べた表現となっている。また、(107) の「だんだん」には、“was getting dark”の進行形が対応していると思われるが、(106) の「どんどん」、(108) の「どっさり」の対応英語表現は、存在しない。

一方、次の例は、オノマトペのない英語原文の日本語訳に、オノマトペが表れている場合である。これは、語り手が、現場の事象の雰囲気を体験したためである。

(109) Pretty soon there were more of them on the road and fewer carriages pulled by horses. (*The Little House*：14)
そして　まもなく、そういう　くるまは　どんどん　ふえて、ばしゃは　へっていきました。 (『ちいさいおうち』：14)

(110) At first, the wind blew in great gusts. Then it quieted. (*Curious George*：50)
はじめ、かぜは　ぴゅうぴゅう　ふいていましたが、そのうち　だんだん　おさまってきました。
(『ひとまねこざるときいろいぼうし』：50)

(111) Nutmeg stood up. (*Nutmeg*)
ナツメグは　すっくと　たちあがりました。
(『ナツメグとまほうのスプーン』)

(112) The floor were all shiny. But the rooms were very empty. (*A Chair for My Mother*)
ゆかもぴかぴかになりました。だけど、なにもないので家の中はがらんとしています。 (『かあさんのいす』)

「どんどん」「だんだん」「すっくと」の対応英語表現は存在しない。ま

た、(112) での shiny と empty は、「ぴかぴか」「がらん」に対応するが、これらのオノマトペの始原的な身体感覚は、英語の対応表現は持ち合わせていないものである[7]。

3.1.3　主人公と語り手の〈共通感覚体験〉

「ような」「そうな」や「オノマトペ」のような、語り手の体験性・感覚性を表す表現は、英語では表し得ないものであった。これらの表現は、英語原文にはなく、日本語訳で付け加えられるものである。逆に、日本語原文でのこれらの表現は、英訳の際には、事態把握の対象からは抜け落ちたものとなっている。

本節では、「そうな」「ような」「オノマトペ」以外の感覚表現をとりあげる。以下の例では、語り手が、主人公と一体化した、〈共通感覚体験〉が表れているといえる。語り手が、主人公に自己投入し、主人公の気持や、場面の雰囲気を語り手が体験したものである。

これらの表現の事例も限りないが、次の英語原文と日本語訳をみてみよう。これらの日本語訳には、英語原文にはない、語り手の語りの現場での心的体験がつけ加えられているという特徴を有するものである。

(113)　And then the games began.　(*Olle's Ski Trip*)
さあ、ゆかいなことがはじまりました。　(『ウッレと冬の森』)

(114)　But Freddie's Summer soon passed.
(*The Fall of Freddie the Leaf*)
けれど　楽しい夏はかけ足で通り過ぎていきました。
(『葉っぱのフレディ』)

(115)　After a good meal and a good pipe George felt very tired.
(*Curious George*：26)
おいしい　ごはんを　たべて、いっぷくすると、じょーじは

いっぺんに　つかれが　でて、ねむたくなりました。

（『ひとまねこざるときいろいぼうし』：26）

(116)　... in the night, under the sky.　She thought about the wide world all around her and smiled.　（*At Night*）

よるの　そらは　ひろびろと　して、せかいが　どこまでもどこまでも　つながっていくのを　かんじます。

（『よぞらをみあげて』）

(117)　..., and he started home, eager to amaze his father and mother with his magic pebble.　（*Sylvester and the Magic Pebble*）

シルベスターはよろこんで、父さんと母さんをおどろかせようといそいで　うちへ帰りました。

（『ロバのシルベスターとまほうの小石』）

(118)　... but he had felt the need to come.

（*The Money Changers*：422）

……、居ても立ってもいられない気持だったのだ。

（『マネーチェンジャーズ（下）』：259）

(119)　“Finally it got to the last day of September....”（*Hotel*：324）

「やがて、待ちに待った 9 月の最後の日がやってきた。……」

（『ホテル（下）』：195）

(120)　“That I was ever married?”　The old man smiled. “Not many do....”　（*Hotel*：384）

「わたしが結婚したことがあるってことをかい」　トレントはさびしくほほえんだ。「知っている者は少ないだろう。……」

（『ホテル（下）』：284）

これらの日本語訳には、主人公が心的に体験したであろうことがらが、語り手の心的体験とオーバーラップして述べられているのである。

(117) では、英語原文の eager という客観的な表現が、「よろこんで」という主人公の感情を表した表現に訳出されていることが注目される。

以下は、上の例とは逆に、日本語原文で表れている語り手の心的体験が、英語訳では表れていない例である。

(121) あさえは、ちからをいれて　うなずきました。
(『いもうとのにゅういん』: 28)
Naomi nodded. (*Naomi's Special Gift*: 28)

(122) おかねが　ふたつとも　みつかったので、みいちゃんは、げんきに　さかを　かけのぼりました。
(『はじめてのおつかい』: 13)
Clenching the two coins as tightly as she could, she ran up the hill. (*Miki's First Errand*: 13)

(123) とのさまは、白馬をとりあげると、けらいたちをひきつれ、おおいばりで帰っていきました。 (『スーホの白い馬』)
Then the Governor, taking the white horse, strutted home, followed by his guards. (*Suho's White Horse*: 25)

(124) かなしさとくやしさで、スーホはいくばんも、ねむれませんでした。 (『スーホの白い馬』)
Night after night, Suho lay awake crying.
(*Suho's White Horse*: 41)

(125) ……、まるで我が世の春といった気分だった。
(『凍える牙』: 103)
..., still she felt on top of the world. (*The Hunter*: 58)

(126) 「了解！」。だらけ始めていた気持ちがいっぺんに引き締まった。 (『凍える牙』: 467)
"OK!" His mood was instantly taut. (*The Hunter*: 244)

(127)　どこへ行ってもおもしろくないような心持ちがするのです。私は、飛泥の上がるのもかまわずに、糠る海の中をやけにどしどし歩きました。　(『こころ』：211)

It did not seem to matter where I went.　I walked angrily and aimlessly in the mud, not caring whether I got splashed or not.

(*Kokoro*：198)

次の「夕闇」や「星霜」もこの種の〈共通感覚体験〉を表す表現にいれてよいかもしれない。

(128)　辺りに夕闇が迫ってきた頃、警察犬が到着した。

(『凍える牙』：235)

As the day was drawing to a close, the police dogs arrived.

(*The Hunter*：124)

(129)　あれからさらに三十年余の星霜が流れた。

(『戸隠伝説殺人事件』：40)

More than thirty years had passed since that last visit.

(*The Togakushi Legend Murders*：37)

「星霜」の対応英語表現の years は、「星霜」の持つ情緒的・体験的な時の推移の感覚は表し得ない。

3.1.4　〈感情体験〉――「びっくりした」「驚いた」――

「びっくりして」「驚いて」は、先の 3.1.3 節の「共通感覚体験」とも重なるものであるが、絵本・童話には、特に、この種の表現が数多く見受けられるので、あえて、本節で別個に扱ってみたい。

もちろん、「驚いた」「びっくりした」に、何らかの意味で対応英語表

現が存在する場合のほうが、一般的であることはいうまでもないことである。

(130) かあちゃんが、びっくりして　まわりをみわたすと、……
(『せんたくかあちゃん』：29)
Mom looked around in surprise.
(*Sudsy Mom's Washing Spree*：29)

(131) だれもくるはずがないと決めていただけに、信夫はおどろいた。(『塩狩峠』：56)
Having been quite sure no one would be there, Nobuo was flabbergasted. (*Shiokari Pass*：51)

(132) Everyone was surprised. (*Curious George*：50)
みんな　びっくりしてしまって、……
(『ひとまねこざるときいろいぼうし』：50)

(133) CHOO CHOO frightened all the people and...
(*CHOO CHOO*)
ひとも　おどろきました。
(『いたずらきかんしゃ　ちゅうちゅう』)

もっとも、日本語の「驚いた」「びっくりして」は、主人公と語り手の語りの現場での、体験的な「おどろき」を表しているが、英語の対応表現は、あくまで、客観的な〈驚き〉の事実を伝えているだけという違いがある[8]。

しかし、日本語では、〈驚き〉の語り手の感情表現が表れているのに対し、対応英語表現では、〈驚き〉といった感情が全く表されていない事例が、特に絵本や童話においては、少なからず、見受けられる[9]。

まずは、日本語原文において、「びっくりした」「驚いた」の表現が表

されているのに、対応英語表現では表されていない例である。

(134) そこで、シャープペンの　おにいさんが　こっそり　いいました。それをきいた　くろくんは　びっくり！

(『くれよんのくろくん』)

Then Clutch Pencil whispered something into Blackie's ear. Blackie couldn't believe what he heard.

(*Blackie, the Crayon*：20)

(135) かみなりさまは　かがみを　のぞいて　びっくり。

(『せんたくかあちゃん』：27)

The thunder demon could hardly believe his eyes.

(*Sudsy Mom's Washing Spree*：27)

(136) 101 ちゃんの　しらせを　きいて、みんなは　びっくり。

(『おたまじゃくしの 101 ちゃん』)

When they heard his story, all the tadpoles leapt into action.

(*Tadpole 101*：20)

(137) きつねは　びっくりして、ひげを　いっぽん　ひっこぬいてしまった。　(『どろんこおそうじ』：12)

He falls backwards and pulls out one of his whiskers by mistake!　(*Grandma Baba's Big Clean-up!*：12)

(138) ひとの切符をびっくりしたように横目で見てあわててほめだしたり、……　(『英語で読む銀河鉄道の夜』：140)

... or just stealing glances at people's tickets and praising them to the high heavens, ...

(『英語で読む銀河鉄道の夜』：141)

; the way he stole startled glances at people's tickets, then hastily started praising them.

（*Night Train to the Stars*：54）

もっとも、小説においても、このような例は見受けられる。

(139) 「女房はこの春、亡くなったんだよ」
「知ってます」
「え？　……」
立花は驚いて、あやうく紅茶をこぼしそうになった。
（『戸隠伝説殺人事件』：172）
“My wife died this spring.”
“Yes, I know.”
“You do?”
Tachibana almost spilled his tea.
（*The Togakushi Legend Murders*：141）

(140) 荷を牛につんだ男や裁着をきた旅人たちが驚いたように侍を見あげ司祭を凝視する。（『沈黙』：158）
The men with their beasts of burden and the travelers in their Japanese clothes looked up at the samurai and stared at the priest.（*Silence*：100）

(141) 「……数が大きくなればなるほど、完全数をみつけるのはどんどん難しくなる」 億の桁の数字を博士が苦もなく導きだしてくるのに、私は驚いた。（『博士の愛した数式』：70）
“...The farther you go, the more difficult they are to find”—though he had easily followed the trail into the billions!
（*The Housekeeper and the Professor*：45）

(142) 「それどういう意味？　ねえ、なんのこと？」
島村は驚いて駒子を見た。（『雪国』：147）

“A good woman—what do you mean by that? What do you mean?”

He only stared at her. (*Snow Country*：147-148)

(143) 鈴の鳴りしきるあたりの遠くに鈴の音ほど小刻みに歩いてくる駒子の小さい足が、ふと島村に見えた。島村は驚いて、最早ここを去らねばならぬと心立った。 (『雪国』：153)

Far away, where the bell tinkled on, he suddenly saw Komako’s feet, tripping in time with the bell. He drew back. The time had come to leave. (*Snow Country*：155)

これらの中では、(134) と (135) の「びっくり」は、“couldn’t believe what he heard”、“could hardly believe his eyes” と、いわば、客観的に英訳されているのが注目され、また、(142) と (143) についても、「驚いて」の対応英語表現は、“stared at”、“drew back” という、観察可能な動作の客観的な描写になっていることが注目される。

次は、これとは逆のパターンとして、英語原文には、「びっくりした」「驚いた」の表現がないのに、これらの表現が日本語で訳出されている例であるが、やはり、絵本や童話においてよく見出せる。

(144) Koala didn’t know there so many books in the world.

(*Koala and the Flower*)

コアラは、たくさんの本をみて、**びっくりしました**。

(『コアラとお花』：18)

(145) As soon as the children started to scrub, they began shouting.

(*Harry the Dirty Dog*)

こどもたちは、ブラシで　こすると、びっくりしました。

(『どろんこハリー』)

(146) An hour later the painters came back. They opened the door —and stood there with their mouths wide open.

(*Curious George Takes a Job*：26)

１じかんほどして、ぺんきやさんが　もどってきました。
まどを　あけた　とたんに、あっと、おどろきました。

(『ひとまねこざる』：26)

(147) He was growing, and when he looked at his reflection in the water, he hardly recognized himself.

(*Farfallina and Marcel*)

水にうつった　じぶんのすがたを見て　びっくり……
まえよりも　からだが　ずっと大きくなっていて、まるでじぶんじゃないみたい。　(『ファルファリーナとマルセル』)

(148) Everyone stared. (*Make Way for Ducklings*)

まちのひとたちは、びっくりして　みつめました。

(『かもさんおとおり』)

(149) The clapper of the bell hit Sid so hard that he fell overboard.

(*Fly High Fly Low*：42)

ベルの音があまりに大きかったので、シッドはびっくりぎょうてん、ころげおちてしまいました。

(『とんで　とんで　サンフランシスコ』：42)

(150) The noise grew louder and louder as Beady moved along, ever so slowly and shakily. (*Beady Bear*：38)

ビーディーくんが、おっかなびっくり、そろりそろりと　いりぐちのほうにすすんで　いくと、おとは、ますます　おおきくなりました。　(『くまのビーディーくん』：36)

(151) Someday you will look at this house and wonder how something that feels so big can look so small. (*Someday*)

あなたは　ふりかえり、あんなに　おおきかった　いえが　とても　ちっぽけに　みえることに　おどろくだろう。

（『ちいさなあなたへ』）

(152)　Mr. Wagonwheel looked up into the sky to see what sort of a day it was going to be.　And he nearly fell out of his seat.

（*The Dragons of Blueland*：54）

ワゴンさんは、きょうはどんなおてんきになるだろうとおもいながら、空をみあげました。そのとたん、ばしゃからころげおちそうになるほどおどろきました。

（『エルマーと 16 ぴきのりゅう』：89）

(153)　“Not going to Redmond!” Marilla lifted her worn face from her hands and looked at Anne.

（*Anne of Green Gables*：304）

(153a)　「レドモンドに行かないんだって？」マイラはびっくりして顔をあげた。

(153b)　「レドモンドに行かないんだって？」マイラはやつれた顔から両手をはなし、アンを見つめた。　（『赤毛のアン』）

(151) では、wonder が「おどろくだろう」と体験的に訳されていることが注目される。また、興味深いのは、(153a) と (153b) の訳文の比較である。(153a) の日本語訳は、「CD-ROM 版　新潮文庫の 100 冊」(1995) に収録されている村岡花子によるものであるが、(153b) の日本語訳は、村岡美枝の補訳が加えられた現在の新潮文庫 (2008) のものである。あきらかに、「びっくり」のある (153a) のほうが、(153b) の訳文よりも、親しみやすい訳であるといえる。

小説においても、「びっくり」「驚き」を表す英語表現が英語原文にはないが、日本語に訳出されている例が見出される。

(154) ..., and when the cabman got down from the box and looked, there was no one there! ("A Case of Identity" *The Adventures of Sherlock Holmes*：41)

馭車も、馭車台から降りてなかをのぞいてみて、びっくりしていました。いるはずのあの人がいないのですもの！

(「花婿失踪事件」『シャーロック・ホームズの冒険』：92)

(155) Bullivant shied away, and before any more blows could fall, and before Mr. Raynor realized that such a thing was possible, Bullivant lashed back with his fists, ...

("Mr. Raynor the School-Teacher" *The Loneliness of the Long-Distance Runner*：76)

ブリヴァントは驚いて飛びのき、それ以上杖がふりおろされる前に相手の意表をつき、拳を固めてはげしく殴りかかってきた。 (「レイナー先生」『長距離走者の孤独』：105)

(155) についていえば、英語の shy には、「〈特に馬が〉(…に驚いて) 後ずさりする、飛びのく」(『ランダムハウス英和大辞典』) や、"if a horse shies, it makes a sudden movement away from something because it is frightened" (*Longman Dictionary of Contemporary English*) との記述があり、きわめて、具体的で観察可能な客観的な意味合いであるが、日本語においては、それよりも、「驚いて」の持つ「その現場にあって、今」の臨場感のほうが、優先されているといえよう。

日本語原文の場合であれ、日本語訳の場合であれ、特に、絵本や童話の日本語において、〈驚き〉の感情が言語化されやすいのは、語り手が、絵本や童話においては、より、主人公の内面の感情に同調・共感する傾向があり、よって、その感情が言語化される傾向があるためと思われる。一方、英語で〈驚き〉の感情が、日本語ほどは、言語化されにく

いのは、英語においては、主人公の内面よりは、客観的な事象の描写に焦点があるためということになる。

よって、これまでのことは、次のようにまとめられると思われる。

(156) 「〜そうな」「〜ような」「オノマトペ」、または、「びっくりした」「おどろいた」等の〈感覚・感情表現〉が用いられた体験的日本語表現は、英訳の際に、訳出されない場合もある。

逆に、客観的・分析的な英語表現は、日本語訳の際に、英語原文にはなかった「〜そうな」「〜ような」「オノマトペ」、または、「びっくりした」「おどろいた」等の〈感覚・感情表現〉が付け加わって訳出される場合もある。

(156) で述べられている主観表現における日英語の違いは、「日本語の書き手は、情景の中つまりオンステージに身を置き、主観のおもむくままに描写する」(宗宮 2012：202) のに対し、「英語の書き手は、情景が自分にも読者にも分かりやすいよう客観的に描く。……英語では情景が書き手とは独立に存在している」(宗宮 2012：202-203) とする、日本語と英語の情景描写の違いにもつながるものである[10)]。

3.2 「直接話法」と共に用いられる「伝達動詞」と「感情表現」

これまで、感覚・感情表現における日英語の比較をし、日本語に感情表現が表れる例に対し、英語には表れない場合があることをみて、これは、日本語においては、語り手が主人公に「共感」しやすいためであることを見た。

このパターンのさらなる下位区分として、「直接話法」と共に表れる「伝達動詞」と「感情表現」の共起に関する日本語と英語の違いについてみてみたい。

もちろん、先の (17) や次の (157) のように、「伝達動詞」や「感情表現」について、日本語と英語で、それぞれが、対応する場合が一般的であることはいうまでもない。

(17) The fog rolled along the sand bar and out over the water and suddenly Elmer shouted, "There, behind you! Look at the pretty green island!" (*Elmer and the Dragon*：19)
あさせの上のきりが、はれはじめました。そして、あさせのまわりの水が、みえてきました。とつぜん、エルマーは、さけびました。「みえるぞ、うしろがわだ！　ほら、きれいな、ちっちゃな、みどりの島がみえるだろ！」 (『エルマーとりゅう』：33)

(157) "What happened?" said Alexander, surprised.
(*Alexander and the Wind-Up Mouse*)
「どうしたの？」 びっくりして　アレクサンダはいった。
(『アレクサンダとぜんまいねずみ』)

しかし、特に、絵本や童話においては、次の (158) (159) のように、日本語原文においては伝達動詞は用いられずに、3.1.3 節、3.1.4 節のような感覚・感情表現が表れ、一方、対応英語表現には、日本語原文にはない伝達動詞が用いられ、かつ感情表現が英訳されていない例など、要するに、感情感現は日本語に表れやすいが、逆に、伝達動詞は英語に表れやすいことを示す例はかなり見受けられる。

(158) あさごはんのとき、ぐりと　ぐらは、「うちのなかが　ほこりだらけ」と　びっくりしました。(『ぐりとぐらのおおそうじ』：4)
Eating breakfast, Guri and Gura look around their house.
"Boy our house is really dirty!" they exclaim.

（*Guri and Gura's Spring Cleaning*：4）

(159) 「そらまめくん、だいじな　ベッドが　ぬれちゃうよ！」
みんなが　びっくりしていると、そらまめくんは　いいました。「やっぱり　ぼくの　ベッドが　いちばんさ！　……」
（『そらまめくんとめだかのこ』：22）
"Your precious bed will get wet, Big Beanie!" said the others. "But my bed is the best! ...," he said.
（*Big Beanie and the Lost Fish*：24）

(160) 「ひとりで！」みいちゃんは、とびあがりました。
（『はじめてのおつかい』：3）
"All by myself?" asked Miki.　（*Miki's First Errand*：3）

(161) お母さん狐は、「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。」とつぶやきました。　（『手ぶくろを買いに』：30）
"Dear me!" his mother gasped.　Then she looked at him and murmured: "People really must be good.　People really must be good!"　（*Buying Mittens*：31）

(162) スーホは、かっとなって、むちゅうで言いかえしました。「わたしは、けいばにきたのです。馬を、売りにきたのではありません」　（『スーホの白い馬』）
Suho turned red with anger and shouted, "Governor, I came here to enter a horse race!　I didn't come here to sell you my horse!"　（*Suho's White Horse*：23）

小説においても、以下のような例が見受けられる。

(163) 「あの……失礼ですけど、天道さんのところにおいでになったの

ではありませんか。」

「えっ……」立花は驚いた。

「どうしてそれを？　……」　　（『戸隠伝説殺人事件』：236）

“Excuse me, but you weren’t by any chance staying with the Tendoh family then, were you?”

“What?” exclaimed Tachibana in astonishment.

“How did you know?”

（*The Togakushi Legend Murders*：191）

(164)　「人相はともかく、目付きは鋭かったでしょう。あれは刑事ですよ」「刑事……」　桂一は驚いて、立花の笑顔を呆れたように見た。　　（『戸隠伝説殺人事件』：280-181）

“Well, maybe not their faces, but their expressions at least. They were detectives.” “Detectives?” said Keiichi with a bewildered look.　（*The Togakushi Legend Murders*：224）

(163) では、「驚いた」に相当する in astonishment の表現があるが、英訳では、新たに exclaimed という伝達動詞が付け加わっている。一方、(164) では、「驚いて」が英訳されず、said という伝達動詞が新たに加えられている。

次は、逆に、英語原文では、「直接引用」と伝達動詞のみで、主人公の驚きの感情は表されていないが、日本語訳では、発話を発言する主人公の驚きの感情が新たに付け加えられた例である。次の (165) は、この種のパターンの典型ともいえる例である。

(165)　“Turned to stone?” said Faith.　“By who?”

（*The Lying Carpet*：23）

フェイスは、おどろきました。

「わたしが？　だれが私に魔法をかけたの？」

（『ほらふきじゅうたん』：23）

英語原文では、発言の直接引用と伝達動詞の said が記されているのみであるが、日本語訳では、said の伝達動詞が訳出されず、主人公と一体化した語り手の感情の「おどろきました」が新たに付け加えられている。

以下は、そのような例である。

(166)　“Oh no” said Grandpa Lev.　“Stop that horse!”

（*Firehorse Max*）

「なんてこった！」と、レヴじいさんは頭をかかえます。

「だれか、あの馬をとめてくれ！」（『しょうぼう馬のマックス』）

(167)　“Don’t you wish you were a flying carpet?” said Faith, when the Carpet had come to the end of his story.

（*The Lying Carpet*：52）

物語がおわったとき、フェイスは、ほおっと、ためいきをつきました。「あなたも、空とぶじゅうたんになりたいって思わない？」　（『ほらふきじゅうたん』：52）

(168)　Mr. McBee gasped.　“You’re not being quiet!” he said to the lion.　“You’re breaking the rules!”　（*Libray Lion*）

マクビーさんは、びっくりして　いいました。「しずかにしなきゃ、いけないんだぞ！　きまりをまもってないじゃないか！」

（『としょかんライオン』）

(169)　It was raining even harder as Ben climbed a rock and spied the lodge in the distance.　“Dad!　The red flag!” Ben yelled.

（*Ben the Beaver*：15）

雨は、ますます　つよくなっていきます。ベンは　いわに　のぼり、とおくを　みたとたん、おどろいて、叫びました。「たいへんだ！　おとうさん、あかい　はたが　でている！」

（『ビーバーのベン』：13）

(170) “Oh, how wonderful!” said my father.

（*My Father's Dragon*：9）

「うわあ！　すごいなあ！」　エルマーは、おどろきました。

（『エルマーのぼうけん』：21）

(171) “I'm on my way home to the great high mountains of Blueland!” He shouted to the evening skies.

（*The Dragons of Blueland*：1）

「さあ、ぼくはたかい山にかこまれた「そらいろこうげん」――ぼくのうちへかえるんだ！」　りゅうは、夜空にむかって、うれしそうに叫びました。　（『エルマーと 16 ぴきのりゅう』：11）

(172) “Horace!” Mama shouted, and she dropped her knitting.

（*Brave Horace*）

「きゃっ！」　ママは、びっくりして、あみものを　おとしてしまいました。　（『かいじゅうなんかこわくない』）

(173) Geraldine gnashed her teeth. “Wille, WILL YOU PLEASE STOP COPYING ME!” （*Geraldine First*）

とうとう　ジェラルディンは　かんかんに　おこってしまいました。「ウィリー、**おねがいだから、ぜったいに　まねしないで！**」　（『ジェラルディンとおとうとウィリー』）

(174) his mother called him “WILD THING!”
and Max said “I'll EAT YOU UP!”

（*Where the Wild Things Are*）

おかあさんは　おこった。「この　かいじゅう！」

マックスも　まけずに、「おまえを　たべちゃうぞ！」

（『かいじゅうたちのいるところ』）

(175)　till Max said “BE STILL!”　（*Where the Wild Things Are*）

とうとう、マックスは　はらをたてた。

「しずかに　しろ！」と　どなりつけた。

（『かいじゅうたちのいるところ』）

(165) から (175) の 11 例のうちで伝達動詞が、日本語に訳出されているのは、(168) (169) (171) の 3 例のみである。また、(168) の gasp（はっと息をのむ）や (173) の gnash one’s teeth（歯ぎしりをする）という客観的・描写的な表現が、それぞれ、「びっくりして」・「かんかんにおこってしまいました」と感情的な表現になっていることも注目されよう。

ちなみに、小説においても、said, remark といった伝達動詞が日本語訳されていない、次のような例が散見される。

(176)　‘Why, dear me, it sounds quite hollow!’ he remarked, looking up in surprise.　（“The Red-Headed League” *The Adventures of Sherlock Holmes*：80）

「おや！なんだかうつろな音がする！」と驚いて顔をあげた。

（「赤髪連盟」『シャーロック・ホームズの冒険』：72）

(177)　‘I can see nothing,’ said I, handing it back to my friend.　（“The Blue Carbuncle” *The Adventures of Sherlock Holmes*：182）

「僕には何もわからない」 私は閉口して帽子をホームズの手にもどした。

（「青い紅玉」『シャーロック・ホームズの冒険』：214）

(178) ‘That is our signal,’ said Holmes, springing to his feet: ‘it comes from the middle window.’ (“The Speckled Band” *The Adventures of Sherlock Holmes*：234)

「合図のあかりだ。ふむ、まん中の窓だな」 ホームズは椅子をけって立ちあがった。

(「まだらの紐」『シャーロック・ホームズの冒険』：272)

さらに、すでに本稿で用いられた次の例も、「直接話法」と共に用いられる「感情体験」表現の例として、再度、ここで上げておきたい。

(30) “My dear little girl, you mustn’t cry like this,” she said, genuinely disturbed by Anne’s tragic face.

(*Anne of Green Gables*：178)

「いい子だから、そんなに泣いちゃいけないことよ」アラン夫人はアンの悲劇的な顔を見ると、しんからびっくりしてしまった。

(『赤毛のアン』：308)

(73) “You’ve been crying,” remarked Josie, with aggravating pity.

(*Anne of Green Gables*：281)

「あんたは泣いてたのね」ジョシーは、しゃくにさわるような同情ぶりを見せた。 (『赤毛のアン』：478)

少なくとも、以上のことから、特に、絵本や童話の日本語においては、「直接話法」と直接話法を発する人物の感情表現は共起しやすい傾向にあるという特徴は指摘できそうである。もっとも、この特徴は、すでに、3.1.4 節の「〈感情体験〉――「びっくりした」「驚いた」――」ですでに指摘したことではあるが、「直接話法」は、主人公の気持がそのまま表れたものであるため、絵本や童話においては、語り手が、主人公の

「直接話法」の内容に共感しやすく、新たな感覚・感情的な表現が表れやすくなるのではないかと考えられる。一方、これとは逆に、「直接話法」を伝える伝達動詞については、日本語よりは英語において、用いられやすい傾向にあると思われるが、このことについては、次のような認識論的原理が働いているためではないかと考えられる。

(179) 「伝達動詞」は、あくまで、「直接話法」の発し方を客観的・分析的に捉えたものであって、「伝達動詞」が表す行為それ自体は、語りの現場に存在するものではない。よって、〈見え〉として捉えることはできず、体験的把握の対象にはなりえない。一方、「直接話法」を発する際の、発話者の感情は、語りの現場に存在するもので、〈見え〉として捉えることができ、体験的把握の対象になりえる。

そうであるとすれば、日本語の体験的な把握においては、「直接話法」を発する主体の感情がより重視されるのに対し、英語の分析的把握においては、「直接話法」をどのように伝えたのかを客観的に述べる伝達動詞が、より重視される傾向にあるということが説明されよう。

よって、次の一般化が可能になると思われる。

(180) 特に、絵本や童話の場合、「直接話法」と共に表われる感情表現については、英語よりは日本語において表れやすい傾向があるが、逆に、「直接話法」を伝える伝達動詞については、日本語よりは英語において表れやすい傾向がある。

(180) の一般化の度合いにおいて、絵本と小説で差があるとすれば、小説においては、原則的に、翻訳の正確さが求められ、単語すべてがその

まま、訳出されることが一般的であるが、絵本においては、読者層に子供が多いことから、翻訳の正確さよりは、より、子供の感覚に訴える表現が優先されることが関わっているためと思われる。（この例としては、先にあげた（153a）（153b）の訳文の比較をあげることができよう。）もっとも、このことについては尾野（2008：40）での、「絵本での例文が日英語の最も基本的な用法を表していると考えられる」との見解が成り立つように思われる。とはいえ、（180）の一般化は先に述べた（156）の一般化と重なるものであり、（180）の一般化は、「伝達動詞は日本語よりは英語に表れやすい」との知見を、新たに、（156）に付け加えたものであるともいえる。

3.3 「思う」と「思考体験」

これまで、日本語においては、主語となる主人公の体験が語り手の体験と共感しあって、感覚体験・感情体験となって述べられやすいことをみてきたが、このことは、主人公の思いが、そのまま語り手の思いと重なりあって、主人公の内面が共感表現となって表れることが予想される。一方英語では、「思い」の内容を共感としてではなく、語り手は、客観的な事実として述べるであろうことが予想される。

森田（1986：265）は、「思う」について、「刹那的判断ないしは、感性の没入で、それだけに対象把握は単一的であって、物事を分析的に眺め捉える知的行為ではない」としているが、「刹那的判断ないしは、感性の没入」とは、いわば、心的体験とみなすことが可能であろう。また、牧野（1996：101）にも、「「思う」という動詞の補文でも「ウチ形」しか使えません。これも、思う内容は内的独白で、全くウチ向きだから、ソト形はとれません」との記述があるが、「思う」が表す「内的独白」とは、語り手の感覚・感情体験と解されるとしてよいであろう。

もちろん、日本語の「思う」と英語の think が対応する場合があるこ

とはいうまでもない。

(181) 『オオカミみたいな　すごみの　ある　ひくい　おこえで。』といいかけたが、しつれいだと　おもい、くちを　とじる。

(『あらしのよるに』)

The goat was just about to say : Your vice sounds like a wolf's, low and gruff.　But he thought this might offend his companion, so he stopped himself.　(*One Stormy Night...*)

(182) "Then this can't be Easter," he thought, and went on his way.

(*The Bunny Who Found Easter*)

「ここは　イースターじゃない」うさぎはおもってたびをつづけました。　(『うさぎのだいじなみつけもの』)

もっとも、これらのように「思う」と think が表面的には対応していると思える場合があっても、「思う」においては、語り手と主人公が同じ共感思考体験をしているニュアンスがあるのに対し、think では、そのようなニュアンスはありえない。

しかし、実際には、日本語の「思う」の対応英語表現として think が用いられていない例もかなり見受けられる。

まずは、日本語原文が「思う」の場合の、対応英語表現をみてみよう。

(183) みみも　つぶれるかとおもうくらい。(『うみのがくたい』: 22)

It is enough to burst your eardrums.

(*The Ocean-Going Orchestra* : 22)

(184) 「ぎゅうにゅう　ください」と、いいました。うんと　おおきなこえを　だそうと　おもったのに、　ちいさな　こえしか　で

ませんでした。　　（『はじめてのおつかい』：14）

“Excuse me... I want to buy some milk.” She tried to say this in the biggest voice she had, but it came out very quietly.

（*Miki's First Errand*：14）

(185)　男は苛立ち、相手をむりやり捩じふせてでも、泥をはかせてやりたいと思った。　　（『砂の女』：99）

He was angry; he wanted to make her admit her guilt even if he had to force it out of her.

（*The Woman in the Dunes*：90）

(186)　すべてを委せきった、女の腕の中で、自分はすべすべした平らたい河原の小石になるのだと思った。　　（『砂の女』：258）

He abandoned himself to her hands as if he were a smooth, flat stone in a river bed.　（*The Woman in the Dunes*：232）

(187)　このとき、彼はまた腕時計を出した。よく時計を見る人だと女たちは思った。　　（『点と線』：13）

He again checked the time.　The girls noticed the ways he kept looking at his watch.　　（*Points and Lines*：12）

(188)　これは無理な質問かもしれない、と重太郎は思った。四五日前のことなのである。日を言ってもわかるまい。（『点と線』：60）

Torigai was aware that the question was difficult; the event had occurred four or five days before.　The man would probably not remember the date.　（*Points and Lines*：41）

(189)　この顔は異邦人の中での基督信者の顔なのだと司祭は思った。

（『沈黙』：245）

This was the face of a Christian among the infidel.

（*Silence*：157）

(190)　貞行は、菊が出て行かねばならなかったころのことを思った。

（『塩狩峠』：36）

Masayuki remembered the time when Kiku had had to go.

（*Shiokari Pass*：36）

これらの例の対応英語表現としては、主語の内面を述べる thought は用いられず、客観的事実としての内容が述べられているだけである。

次は、逆に、英語原文では、think が用いられていない客観的に述べられた内容が、日本語訳では、「思う」が用いられ、主語が思った内容として述べられているが、これは、体験的表現を好む日本語においては、語り手が主語の内面の体験として述べるためである。いわば、「思う」は、先にあげた視覚体験を表す「見える」のように、主人公の内言の体験を表すいわば、マーカーの役目をしているとも考えられる。

(191) Day after day he waited with all the other animals and dolls for somebody to come along and take him home.

（*Corduroy*）

おもちゃうりばでは、どうぶつも、にんぎょうも、みな、はやく　だれかが　きて、じぶんを　うちに　つれていってくれないかなあと、おもっていました。コールテンくんも、まいにちそう　おもっていました。　（『くまのコールテンくん』：3）

(192) But he couldn't see any other bunnies shaking the rain off their wet white fur.　（*The Bunny Who Found Easter*）

ぷるっと　あめをはらいおとすうさぎが　ほかにいないかなとおもいましたが、みつかりません。

（『うさぎのだいじなみつけもの』）

(193) When at last she felt perfectly satisfied with them, she said one morning: "Come along, children.　Follow me."

（*Make Way for Ducklings*）

マラードおくさんは、やっと、これで　もうだいじょうぶとおもいました。それで　あるあさ、こがもたちに　いいました。「さあ　いきましょう、こどもたち。おかあさんに　ついておいで」　（『かもさんおとおり』）

(194) When it looked as if everything had been unwrapped, Sarah found one last small box behind the tree.

（*The Polar Express*）

ぜんぶをあけ終わったと思ったあとで、サラがツリーのうしろに小さな箱をみつけた。　（『急行「北極号」』）

(195) He packed it round and firm and put the snowball in his poket for tomorrow.　（*The Snowy Day*）

ピーターは、この　ゆきだんごで　あした　あそぼう、と　おもって、ポケットに　しまった。　（『ゆきのひ』：22）

(196) “I am ten”, she wanted to say, but she couldn’t.

（*The Best Present*）

「わたしは、10 さいです」と、いいたいと思いましたが、ことばが出てきません。　（『いちばんすてきなプレゼント』：15）

(197) Freddie loved being a leaf.（*The Fall of Freddie the Leaf*）

フレディは「葉っぱに生まれて　よかったな」と思うようになりました。　（『葉っぱのフレディ』）

(198) We all lived in a small apartment. It was impossible to be alone.　（*When Everybody Wore a Hat*）

ちいさなアパートに　くらしていたから、ひとりになりたいと思っても、とても、むりだった。

（『みんなぼうしをかぶってた』）

小説にも次のような例がある。

(199) I was a little puzzled, but at all events I understood that I might now take my leave. (*The Moon and Sixpence*：28)
僕は、ちょっと困ったなとは思ったが、とにかくもうこれで帰ってもいいだろうと考えた。 (『月と六ペンス』：57)

(200) A slow and heavy step, which had been heard upon the stairs and in the passage, paused immediately outside the door. Then there was a loud and authoritative tap. ("A Scandal in Bohemia" *The Adventures of Sherlock Holmes*：7)
おちついた重い足音が、階段をのぼって、廊下をこっちへ、やがてドアのそとでとまったと思ったら、たれはばからぬ大きなノックが聞えた。
(「ボヘミアの醜聞」『シャーロック・ホームズの冒険』：14)

「思い」についても、「思う」と同じ内容のことがあてはまると思われる。「思い」を用いることによって、語り手は、主人公の「思い」の心的体験に没入しているのである。

(201) マイクに向かって呟きながら、貴子は信じられない思いでライトの照らし出す方向を凝視していた。 (『凍える牙』：471)
She said this into the microphone, staring suddenly straight ahead in disbelief. (*The Hunter*：246)

(202) 「タキさんは……」立花はやっとの想いで言った。
「いま、どこにいるのでしょう？」 (『戸隠伝説殺人事件』：240)
"Where is Taki now?" he finally managed.
(*The Togakushi Legend Murders*：194)

次は、日本語訳に「思い」が表れる場合である。

(203) At last, with careful precision, he put down his coffee cup.
(*Hotel*：235)
やがて、彼はやっとの思いでコーヒー茶碗を下においた。
(『ホテル（下）』：65)

(204) "At least there's nobody over there," Sophie whispered. Langdon nodded, relieved. (*The Da Vinci Code*：430)
「あそこにはだれもいないわ」ソフィーがささやいた。ラングドンは安堵の思いでうなずいた。
(『ダ・ヴィンチ・コード（下）』：161)

(202) の日本語原文と、(203) の日本語訳には、どちらも、「やっとの思い」が用いられているが、ここで興味深いことは、対応する英語表現は、そのような心的な意味合いはなく、どちらも、客観的な描写であるということである。

総じて、本節で述べたことは、本多 (2009：409) の次の見解と一致するものであるといえる。

(205) 日本語の表現構造は、人間の発話や思考を、その人の内面に立ち入ったかたちで一人称的に捉えて表現するものであるのに対し、英語の表現構造は、人間の発話や思考について述べる際にその人の内面に立ち入らず、表出という外部から観察可能なものを指すというかたちで三人称的に捉えて表現するものであるといえるわけである。

本稿の観点からすれば、「人間の発話や思考を、その人の内面に立ち

入ったかたちで一人称的に捉えて表現」する行為は心的な体験行為であるということになろう。

3.4　say「言う」と think「思う」── 野村（2006）の知見との関連性 ──

野村（2006）は、「引用から見る日米語のナラティブ」において、次の（206）を指摘し、これには、（207）の事柄が関わっているとした。

（206）　米語には said タイプ引用が多く、日本語には thought タイプ引用が多い。

（207）　米語においては何が起こったのかに焦点を当てて、客観的な出来事として物語を語る。一方日本語においては、登場人物が心の中で何を思ったのかに焦点を当てて、心の問題をふまえながら物語を語るのである（野村 2006：92）。

本稿でこれまで論じてきたことは、この野村の知見と重なることになると思われる。

まず、日本語において、thought タイプ（「思う」）の引用が多いことについては、例えば、先の（191）の例文が示すとおりである。

（191）　Day after day he waited with all the other animals and dolls for somebody to come along and take him home.

（*Corduroy*）

おもちゃうりばでは、どうぶつも、にんぎょうも、みな、はやく　だれかが　きて、じぶんを　うちに　つれていってくれないかなあと、<u>おもっていました</u>。コールテンくんも、まいにちそう　<u>おもっていました</u>。　（『くまのコールテンくん』：3）

また、次の (208) の英語原文の “said” が「おもいました」と日本語に訳出されている例は、野村のいう、「英語では、「誰が何を言ったのか」の said タイプの引用が多いのに対し、日本語では、「誰が何と思ったのか」の thought タイプの引用が多い」という一般化があてはまる例としてあげることができよう。

(208) At this very moment he heard a lound noise outside.
“It’s a bear!” said Beady. (*Beady Bear*：36)
ちょうどそのとき、おもてで　おおきな　おとがしました。
「クマだ！」と、ビーディーくんは　おもいました。
(『くまのビーディーくん』：34)

ちなみに、野村 (2006：87) は、「say, be like, tell, ask, 言う」を伝達動詞とし、「think,　思う」を思考動詞としているが、(208) における “said” と「おもいました」の使い分けについては、英語は、客観的な事実を述べるのに焦点をあてて伝達動詞の said を用い、日本語は、心の中で何が体験されたのかに焦点を当てて、思考動詞の「思いました」が用いられていると説明されることになる。

ただ、本稿との関連でいうと、(208) の日本語訳については、3.1.4 節で論じた例文にならって、次のような日本語に訳出することも可能であるように思える。

(209) ちょうどそのとき、おもてで　おおきな　おとがしました。
「クマだ！」と、ビーディーくんは　驚きました。

つまり、(208) での「おもいました」の「思考動詞」と (209) での「驚きました」の「感情表現」は、どちらも、語り手の内面の体験を表して

おり、野村のいう「心の問題」を語っている点では、共通していると考えられるのである[11)]。

(209) の日本語訳のパターンにそった実例としては、先にみた、(165) があげられる。

(165)　“Turned to stone?” said Faith.　“By who?”

（*The Lying Carpet*：23）

フェイスは、おどろきました。

「わたしが？　だれがわたしに魔法をかけたの？」

（『ほらふきじゅうたん』：23）

しかし、(165) の日本語訳についても、逆に、(208) のような「おもいました」が用いられた、次の (210) のような日本語に訳出することも十分可能であるといえる。

(210)　フェイスは、おもいました。

「わたしが？　だれがわたしに魔法をかけたの？」

ここでも、「おもいました」と「おどろきました」は、十分交換可能なのである。

先に本稿では、「直接話法」と共に表われる伝達動詞と感情表現について、(180) のように、まとめた。

(180)　特に、絵本や童話においては、「直接話法」と共に表われる感情表現については、英語よりは日本語において表れやすい傾向があるが、逆に、「直接話法」を伝える伝達動詞については、日本語よりは英語において表れやすい傾向がある。

「思う」の思考動詞を、ここでの「感情表現」に入れることは可能であり、また、said は伝達動詞であるので、野村の（206）の「米語には said タイプ引用が多く、日本語には thought タイプ引用が多い」の一般化は、本稿での（180）の一般化と重なることになると思われる。

4　池上（2011）の知見との関連性

「見える」のような視覚表現であれ、「ゆかいな」や「びっくりした」「おどろいた」のような感覚・感情表現であれ、「思う」の思考表現であれ、これらは、語りの現場での語り手の体験を表し、池上（2011：60）のいう〈（事態の）話者との関わり〉を表すものである。よって、〈事態そのもの〉を表す英語においては、これらの体験表現は、すっぽり抜け落ちてしまう傾向にある。一方、直接話法を伝える伝達動詞は、〈（事態の）話者との関わり〉の体験を表すものではなく、〈事態そのもの〉の分析による結果を表すものであるため、英語では表れやすい傾向にあるが、日本語では、英語ほどは用いられず、感情表現にとって代わる場合が多いことは、本稿で見た通りである。本稿での（156）と（180）の一般化は、この池上の知見と重なるものである。

池上（2011：62）は、kind と「親切」を比べて、「日本語話者は英語話者と較べて、外面的な〈振舞い〉よりも内面的な〈気持ち〉の方へ強くひきつけて理解しているように思える」としているが、そもそも、体験的な事態把握は、話し手の内面による把握なのであり、当然のこととして、〈内面的な気持ち〉を表す傾向がでてくることになる[12)]。

この違いは、すでに上で論じた〈驚き〉の客観的事実を伝える“surprised”と心の内面を伝える「驚いて」「びっくりして」で、見た通りである。さらにいえば、日本語話者の「内面的な〈気持ち〉のほうへ引きつけての理解」と英語話者の「外面的な振る舞いにひきつけての理解」の違いは、「そうな」「ような」「オノマトペ」とその対応英語表現の違

いにも当てはまるものである。また、「内面的な〈気持ち〉」と「外面的な〈振舞い〉」の違いは、本多（2005, 2009）のいう「共感的」と「透過的」の違いにも通じるものといえよう。

5　終わりに

本稿では、これまで2節では視覚体験を論じ、3節では感覚・感情体験と思考体験を論じてきた。「知覚者および知覚という出来事はエコロジカル・セルフとして捉えるにとどめ、言語表現としてはゼロ形のままにとどめている」（本多 2005：159）という日本語からすれば、視覚を表す語がなくても、視覚が感覚・感情体験が密接にかかわり合っていることは明らかであるが、すでに、本稿であげた例文の中にも、感情が視覚体験によって引き起こされたことが明示されている例がある。

(29)　Elmer was disappointed.　（*Elmer and the Dragon*：38）
エルマーは、王さまをみると、がっかりしました。
（『エルマーとりゅう』：66）

(30)　“My dear little girl, you mustn’t cry like this,” she said, genuinely disturbed by Anne’s tragic face.
（*Anne of Green Gables*：178）
「いい子だから、そんなに泣いちゃいけないことよ」アラン夫人はアンの悲劇的な顔を見ると、しんからびっくりしてしまった。
（『赤毛のアン』：308）

少なくとも、視覚体験はそのまま、感覚・感情体験につながるものであり、視覚体験はあるが感覚・感情体験がない言語や、逆に、視覚体験はないが感覚・感情体験がある言語の存在は考えられない[13]。視覚体験も感覚・感情体験もどちらも、日本語表現の身体性に関わるものである

ことは明らかである。本稿で論じてきた〈体験〉の概念から、日本語の特質を一言で言うならば、次のようになると思われる。

(211)　日本語は、〈見え〉の体験の共有により共感を形成する言語である[14)]。

池上 (2000：320) は、「日本語という言語は少しつつくと、すぐ〈話す主体〉、〈身体性〉との関わりが顔を出す」と述べているが、本稿では、そのような日本語の特徴の一端を垣間見たことになると思われる。

注

1) 熊谷 (2011)『日本語は映像的である』は、このタイトルからして、本稿の内容と大いに関わりをもつものだが、「日本語は場に重きを置き、英語は所有に重きを置く言語である」としたうえで、日本語が場に重きを置く理由として、「行為の対象がそこに見えているからである」(熊谷 2011：24) とし、「見え」と「場」の関連性を指摘している。「場」と日本語との関わりあいを論じたものとして、メイナード (2000) と岡 (2013) をあげておきたい。

2) 西村 (2000：52) は、次の (i) の例文に対して、以下の説明をしている。

(i)　a. I found the chair comfortable.

b. その椅子は座り心地がよかった。

「この場合にも、英語で主語として表現されている経験 (ないし発見) の主体が、日本語では明示されていない。英語では、経験の主体が (経験内容と同じく表現対象の一部として)「客観的」に解釈されているのに対して、日本語では、表現主体が経験主体と一体化した視点から状況を捉えているという意味で、経験主体に「主観的」な解釈が与えられていると考えられる。」

例文 (i) の日本語と英語の表現の違いについてのこの西村の解説は、

本文の (5)〜(8) の例文にもあてはまるものである。例えば、西村の解説を本文の (5) の例文にあてはめれば、経験主体の they が、英語では、「客観的」に解釈されているのに対し、日本語では、表現主体と経験主体が一体化した観点から状況から捉えられ、日本語では、経験主体である「彼ら」が明示されていない。これを本稿での観点からいえば、主人公の視覚体験と語り手の視覚体験が一体化しているということになろう。

また、「見える」の用法については、北林 (2011, 2013) においても論じられているが、「日本語では、話し手は見えを直接に提示して、語り手は消えて語りの範囲には登場しないか、「見える」が用いられるときのように、見えを表現しつつ、語り手の存在を半分示すという語りの形式になっている」(北林 2011：138) との見解も、本稿の主張と重なるものである。

その一方で、北林 (2013：93-94) では、次の (iia) と (iib) の違いに関し、以下のように述べている。

(ii) a. この車両は片側三つ扉なんですが、いちばん後ろのドアから僕が中に入ると、六五歳ぐらいの男の人が床にごろっと倒れているのが見えました。

b. I entered the third car from the front through the farthest back of the three doors and saw a sixty-five-year-old man sprawled on the floor.

この「〜すると、〜が見えました」というパタンでは、日本語でも英語でも、〈視座〉が明示されて、そこからの〈見え〉が「〜見えました」とか I could see... という表現で表されているという点は日・英語とも同様である。

しかし、「見えました」と“I could see”については、共通点よりは、本稿で述べている〈体験性〉に関する相違点がより強調されてしかるべきであるように思われる。

3) 結局、本文中の(9)〜(24) は、北林 (2013：94) が、以下の例に対し

て、「日本語の場合は、語り手の〈見え〉として表現されていても、英語では〈見え〉としてではなく、一連の出来事（events）として表現される」例としたものと同種の例ということになろう。

（i） a. 外を見ると、到着したばかりのひとたちが、雨を逃れるため、屋根のあるアーケードの方に走って行く。

b. Outside the station the rain drove new arrivals toward the shelter of the covered arcades.

ただ、北林（2013）では、この種の構文を「～すると」に限って論じているように思われるが、本文中の(9)～(24) の中で、「～すると」があるのは、(13)(18)(19) だけである。

4) 田中（1996）は、「みる」の多義性についての論文であるが、「「みる」の多義性は視覚が人間の認知において最も重要な知覚であることを反映しているからである」（田中 1996：122）としている。

また、山梨（2012：108）にも、「見える」が文字通りの視覚に関わる意味から、思考・推論・判断に関わる意味へ拡張されている例があげられている。ただ、本稿の意義をあえていうとすれば、対応英語表現との比較をしているということであろうか。

5) 熊谷（2011：143）は、俳句や短歌がうたうものは、「目前の景色であり、それとあわせて表される心の景色である。俳句や短歌は、語ったり、論じたりするものではない。それが求めているのは、「共に視る」ことである。わずかなことばで表された世界を共視することで、その背景にある景色の広がりや心のひだを共有しようとする」としている。これは、本稿での見地からすれば、景色の視覚体験は、同時に、心的体験でもあり共感でもあるということを意味しよう。

6) 大津（1993a：79）では、「そうな」の出現を、「日本語は見える範囲で表現する言語」であるためとしているが、「見える範囲で表現する」とは、「〈見え〉を体験した範囲で表現する」ことである。また、なぜ、英語では「そうな」のような語が必要ないのかについては、「英語国人は、目に見えないものが見える」ためとしているが、「目に見えないものが見え

る」とは、英語の〈客観的把握〉においては、〈見え〉を捨象し、つまり、大きさや方向性のみならず、時間をも超越した、実在論的世界を描写対象とするためであり（鍋嶋 2011：82）、いわば、事象を、視覚ではなく、認識によって見るということになるであろうか。

ちなみに、鍋嶋（2011）は、〈主観的把握〉に相当するモードをＳモード、〈客観的把握〉に相当するモードをＯモードとしているが、以下の記述は有益であると思われる（鍋嶋 2011：80-81）。

> まず、自己は、Ｓモードでは絶対者であるが、Ｏモードでは基本的にその存在にも特権的地位が存在しないので、無限の世界の中の非常に小さな一点になる。観察主体の欄は説明がやや複雑である。Ｓモードでは絶対者としての自己が観察主体であるが、Ｏモードには特定の視点からの観察という行為が存在しないので、観察主体は存在しない。別の考え方をすれば、存在物または有情物の観察視点をすべて合成したものと考えられるかもしれないし、神の視点と呼ぶこともできるかもしれない。Ｏモードに観察主体が存在しないとした場合、当然、視点（観察主体から眺める方向性、すなわちパースペクテイヴ）は存在しない。

7）熊谷（2011：143-144）には、「日本語および日本人の心理は、場を共有しようとする指向を強くもっている。この指向性は、場を構成する人や物やその動きだけでなく、空気にまで及んでいるのではないだろうか。それに答えるには一般的な文法要素だけでは足りず、多くのオノマトペが求められると考えられるのである。「しーんとしている」「ひっそりしている」「がやがやしている」「ざわざわしている」など、その場の空気を表すことばは日本語に多い。」との記述がある。

8）「びっくりする」と「驚く」については、森田（1986：256）に、「「驚く」は精神の作用。「びっくりする」は驚かされることによって生じる精神の結果である」との記述があるが、さらに、「「びっくりする」は、内容的にはほぼ「驚く」と重なるが、「驚く」がかなり客観的な状況説明として用いられる語であるのに対し、「びっくりする」には、“目を丸くする”

といった臨場感がある。“その現場にあって、今”という感覚である。このような状況の文脈では、「驚く」も「びっくりする」も同等に使える」（森田 1986：255）との記述もある。“その現場にあって、今”という感覚は、まさに本稿での「感覚・感情体験」のことである。英語の surprised では、この“その現場にあって、今”の「体験」は、表し得ない。

また、池上・守屋（2009：107）にも、「「おどろいた！」は、……「驚く」という事態が生じて「今、自分が驚いている状態である」という確かな認識、即ち、感覚的〈見え〉に基づいた話し手の今の状態を表現しています」との記述がある。

9）もちろん、逆の場合もある。次の例をみてみよう。

（i）「母ちゃん、人間ってちっとも恐かないや。」
「どうして？」（『手ぶくろを買いに』：30）
“I’m not at all afraid of people, Mommy,” the little fox said.
“You’re not? Why?” asked his mother, surprised.
（*Buying Mittens*：31）

ここでは、英訳のほうに surprised が表れている。ただ、日本語原文が会話だけであるのに対して、英訳においては、主語と伝達動詞が加わった解説的な文になっていることが注目されるが、このことについては、本文の 3.2 節を参照されたい。

10）宗宮（2012）『文化の観点から見た文法の日英対照』の第 5 章「小説が伝える「ものの見方」」は、本稿での内容と関わりあうものが多く興味深い。しかし、いくつか、問題であると思えるような記述も散見される。例えば、「英語は時間の流れに忠実で日本語は没時間的という言語上の違い……」（宗宮 2012：194）や、「（英語）が情景を立体的に見ることと時間の流れを意識することは連動する」（宗宮 2012：200）のような記述は誤解を招くと思われる。「時の流れ」の体験は、事象の「立体的」ではなく、あくまで「平面的」な把握によってのみ可能になるというべきであろう。

11）そもそも日本語では、「語り」の行為そのものが、「語り手」の「思い」と

して述べられているのではないかと思われるような次のような例がある。このような「おもう」の用法は、英語には存在しないと思われる。

(i) いえが　おおきく　ゆれたかとおもうと、まるで　そらいろのはなびらが　ちるように、やねも　かべも　まども、くずれはじめました。　(『そらいろのたね』：25)

The whole house shook violently and then fell apart, roof, walls and windows.　(*The Sky Blue Seed*：25)

(ii) ブッカが、おゆにもぐった。とおもったら、あわてて、ういてきた。　(『おふろだいすき』)

Then I saw Bobby dive beneath the surface. But soon he came up for air.　(*I Love to Take a Bath*：6)

(iii) Until *baroom!* the whole house shook, the floor tipped up, and Joe fell out of bed.　(*Whale*)

とつぜん、**どどーん！**　いえじゅうが　ゆれたかと　おもうと、ゆかが　かたむいて　ジョーは　ベッドから　ころがりおちました。　(『くじらのうた』)

(iv) He went and fetched his sledgehammer, and he knocked the house down.（*The Three Little Wolves and the Big Bad Pig*）

どこかへ　いったと　おもったら、おおきな　ハンマーを　もって　かえってきて、いきなり　れんがの　うちを　こわしてしまいました。　(『3びきのかわいいオオカミ』：10)

12) 池上 (2011) の参考文献にはあげられていないが、Ikegami (1989：401) では、“Between language (Japanese) and the heart then, there is again only blurred articulation”と述べられ、Ikegami (2003：266) にも、“language in the Japanese tradition is conceptualized not as a tool that is waiting to be used by the speaker, but as something that arises spontaneously from the speaker’s mind/heart” との記述がある。すなわち、日本語においては、「ことば」と「こころ」は、連続したものであるとの主張がされている。もし、そうであれば、日本語表現の

「ことば」には、「こころ」が反映されていることになり、当然、〈(事態の) 話者との関わり〉を示唆する意味合いが多く含まれるということになろう。

また、熊倉 (2011：50) の「体験を経て自分の語彙となるやまとことばは、否応なしに「主観」性を帯びます」との見解も、これらのIkegami の見解と重なり合うと思われる。

13) 熊谷 (2011：139) にも、「人物の視点にもとづいて文が作られるという日本語のこの特性は、日本人が景色を見るときの心の状態にも影響を及ぼしているのではないだろうか」との記述がある。

また、大津 (1993b：226) は、「では、なぜ大和言葉は英訳できないか。それは、大和言葉は観念と余情の複合体だからである。観念の部分は翻訳可能だが、情感的な部分、つまり、私が余情と呼ぶものは、英語には翻訳しようがない」と述べているが、なぜ「余情」が生じるのかについては、視覚体験が言語表現に及ぼす影響という観点から捉える事が可能であるようにも思われる。

14) もっとも、本多(2005：204) にも、「見えの共有が共感、すなわち感情的な経験の共有感につながる」との記述がある。

また、(211) は、熊倉 (2011：194) の「千五百年にも及ぶ中国文化の受容、百五十年以上になる西欧文化の受容にもかかわらず、脈々と続く日本語が培ってきた日本人の人間性ですが、その根底にあるのは日本語が培った同情・共感の「こころ」を他者と共有しようとする意識なのです。この「こころ」の共同体意識こそ、日本語が開発したすばらしい人間性なので……（下線部筆者）」との見解にもつながると思われる。

参照文献

池上嘉彦. 2000.『「日本語論」への招待』講談社.

池上嘉彦. 2004.「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標　(1)」『認知言語学論考　No.3　2003』1-49, ひつじ書房.

池上嘉彦・守屋三千代編. 2009.『自然な日本語を教えるために』ひつじ書房.

池上嘉彦. 2011.「日本語と主観性・主体性」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座　主観性と主体性』49-67, ひつじ書房.

Ikegami, Y. 1989. “Homology of Language and Culture: A Case Study in Japanese Semiotics” in Koch, W. A. (ed.), *The Nature of Culture*, Brockmeyer, 388-403.

Ikegami, Y. 2003. “How Language is Conceptualized and Metaphorized in Japanese: An Essay in Language Ideology” in Cuyckens, H. et al. (eds.) *Motivation in Language,* John Benjamins, 259-271.

大津栄一郎. 1993a.『英語の感覚（上）』岩波新書.

大津栄一郎. 1993b.『英語の感覚（下）』岩波新書.

岡智之. 2013.『場所の言語学』ひつじ書房.

尾野治彦. 2008a.「絵本における日英語の推移表現の比較 —〈臨場的スタンス〉と〈外置的スタンス〉の観点から —」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第 40 号, 37-99.

尾野治彦. 2008b.「〈臨場的スタンス〉がとる推移的表現について — 絵本における英訳との対比を通して —」『日本語用論学会・第 10 回大会発表論文集』第 3 号（2007）, 343-346.

尾野治彦. 2011.「「S1 と、S2」と「やがて」における「体験性」をめぐって — 対応する英語表現と比較して —」（『英文学研究　支部統合号』第 3 巻, 29-46.

尾野治彦. 2012.「〈顔〉を表す視覚的体験名詞をめぐって — 対応する英語表現との対比の観点から —」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第 44 号, 1-59.

北林利治. 2011.『文法における話し手の様相』英宝社.

北林利治. 2013.「日英語における〈見え〉の表現」『表現研究』98, 91-100.

熊谷高幸. 2011.『日本語は映像的である』新曜社.

熊倉千之. 2011.『日本語の深層』筑摩書房.

宗宮喜代子. 2012.『文化の観点から見た文法の日英対照』ひつじ書房.

田中聡子. 1996.「動詞「みる」の多義構造」『言語研究』110, 120-142.

中村芳久. 2009.「認知モードの射程」坪本篤郎・早瀬尚子・和田尚明（編）『「内」と「外」の言語学』353-393, 開拓社.

鍋島弘治朗. 2011.『日本語のメタファー』くろしお出版.

西村義樹. 2000.「対照研究への認知言語学的アプローチ」坂原茂（編）『認知言語学の発展』145-166, ひつじ書房.

野村祐子. 2006.「語り手は何に注目するのか？：引用から見る日米語のナラティブ」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』13, 83-93.

濱田英人. 2011.「言語と認知 ― 日英語話者の出来事認識の違いと言語表現 ―」『函館英文学』第 50 号, 65-100.

本多啓. 2005.『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.

本多啓. 2009.「他者理解における「内」と「外」」坪本篤郎・早瀬尚子・和田尚明（編）『「内」と「外」の言語学』395-422. 開拓社.

牧野成一. 1996.『ウチとソトの言語文化学 ― 文法を文化で切る ―』アルク.

メイナード, 泉子・K. 2000.『情意の言語学 ―「場交渉論」と日本語表現のパトス ―』くろしお出版.

森田良行. 1986.『基礎日本語辞典』角川書店.

山梨正明. 2012.『認知意味論研究』研究社.

例文出典

日本語原文のもの

安部公房. 1981.『砂の女』新潮文庫.

The Woman in the Dunes. E. Dale Sanders(tr.). 1992. Vintage.

内田康夫. 1985.『戸隠伝説殺人事件』角川文庫.

The Togakushi Legend Murders. David J. Selis(tr.). 1994. Tuttle Publishing.

遠藤周作. 1981.『沈黙』新潮文庫.

Silence. William Johnston(tr.). 1969. Taplinger Publishing Company.

遠藤周作. 1986.『侍』新潮文庫.

The Samurai. Van C. Gessel(tr.). 1997. New Directions Classic.

大塚勇三（作）・丸木俊（絵）. 1964.『うみのがくたい』福音館書店.

The Ocean-Going Orchestra. Sarah Ann Nishie(tr.). 2006. ラボ教育センター.

大塚勇三（再話）・赤羽末吉（絵）. 1967.『スーホの白い馬』福音館書店.

Suho's White Horse. Peter Howlett・Richard McNamara(tr.). 2004. アールアイシー出版.

小川洋子. 2005.『博士の愛した数式』新潮文庫.

The Housekeeper and the Professor. Stephen Snyder(tr.). 2009. Picador.

かこさとし. 1973.『おたまじゃくしの 101 ちゃん』偕成社.

Tadpole 101. Peter Howlett・Richard McNamara(tr.). 2007. アールアイシー出版.

かやのしげる（作）・いしくらきんじ（絵）. 2001.『アイヌとキツネ』小峰書店.

The Ainu and the Fox. Deborah Davidson(tr.). 2006. アールアイシー出版.

川端康成. 1947.『雪国』新潮文庫.

Snow Country. Edward G. Seidensticker(tr.). 1956. Vintage International.

木村祐一（作）・あべ弘士（絵）. 1994.『あらしのよるに』講談社.

One Stormy Night... Lucy North(tr.). 2003. 講談社インターナショナル.

さとうわきこ. 1982.『せんたくかあちゃん』福音館書店.

Sudsy Mom's Washing Spree. Sako Laughlin(tr.). 2005. アールアイシー出版.

さとうわきこ. 1986.『どろんこおそうじ』福音館書店.

Grandma Baba's Big Clean-up! Richard Carpenter(tr.). 2005. チャールズ・イー・タトル出版.

しみずみちを（作）・山本まつ子（絵）. 1972.『はじめてのおるすばん』岩崎書店.

Ding-Dong! Sako Laughlin(tr.). 2008. アールアイシー出版.

谷崎潤一郎. 1947.『痴人の愛』新潮文庫.

Naomi. Anthony H. Chambers(tr.). 1985. Tuttle Publishing.

筒井頼子（作）・林明子（絵）. 1977.『はじめてのおつかい』福音館書店.

Miki's First Errand. Peter Howlett・Richard McNamara(tr.). 2003. アールアイシー出版.

筒井頼子（作）・林明子（絵）. 1983.『いもうとのにゅういん』福音館書店.

Naomi's Special Gift. Laylene Mory・Susan Howlett(tr.). 2004. アールアイシー出版.

中川正文（作）・山脇百合子（絵）. 1974.『ねずみのおいしゃさま』福音館書店.

Dr. Mouse's Mission. Mia Lynn Perry(tr.). 2007. アールアイシー出版.

中川李枝子（作）・大村百合子（絵）. 1967.『そらいろのたね』福音館書店.

The Sky Blue Seed. 2004. Sarah Ann Nishié(tr.). ラボ教育センター.

中川李枝子（作）・大村百合子（絵）. 1976.『ぐりとぐらのかいすいよく』福音館書店.

Guri and Gura's Seaside Adventure. Peter Howlett・Richard McNamara(tr.). 2004. チャールズ・イー・タトル出版.

中川李枝子（作）・山脇百合子（絵）. 1992.『ぐりとぐらとくるりくら』福音館書店.

Guri and Gura's Magical Friend. Peter Howlett・Richard McNamara(tr.). 2003. チャールズ・イー・タトル出版.

中川李枝子（作）・山脇百合子（絵）. 2002.『ぐりとぐらのおおそうじ』福音館書店.

Guri and Gura's Spring Cleaning. Richard Carpenter(tr.). 2003. チャールズ・イー・タトル出版.

なかやみわ. 1999.『それまめくんとめだかのこ』福音館書店.

Big Beanie and the Lost Fish. Mia Lynn Perry(tr.). 2004. アールアイシー出版.

なかやみわ. 2001.『くれよんのくろくん』童心社.

Blackie, the Crayon. Mia Lynn Perry(tr.). 2005. アールアイシー出版.
夏目漱石. 1951.『こころ』角川文庫.
Kokoro. Edwin McClellan(tr.). 1969. Tuttle Publishing.
新美南吉（作）・黒井健（絵）. 1988.『手ぶくろを買いに』偕成社.
Buying Mittens. Judith Carol Huffman(tr.). 1999. University of Hawai'i Press.
西内ミナミ（作）・堀内誠一（絵）. 1966.『ぐるんぱのようちえん』福音館書店.
Groompa's Kindergarten. Peter Howlett・Richard McNamara(tr.). 2003. アールアイシー出版.
乃南アサ. 1996.『凍える牙』新潮文庫.
The Hunter. Juliet Winters Carpenter(tr.). 2006. Kodansha International.
林明子. 1989.『こんとあき』福音館書店.
Army and Ken Visit Grandma. Peter Howlett・Richard McNamara(tr.). 2003. アールアイシー出版.
藤沢周平. 1982.「一顆の瓜」『冤罪』新潮文庫.
"All for a Melon" *The Bamboo Sword*. Gavin Frew(tr.). 1981. Kodansha International.
藤沢周平. 1985.「驟り雨」『驟り雨』新潮文庫.
"A Passing Shower" *The Bamboo Sword*. Gavin Frew(tr.). 1981. Kodansha International.
藤沢周平. 1992.「三ノ丸広場下城どき」『麦屋町昼下がり』文春文庫.
"The Runaway Stallion" *The Bamboo Sword*. Gavin Frew(tr.). 1981. Kodansha International.
藤沢周平. 1994.「踊る手」『夜消える』文春文庫.
"Dancing Hands" *The Bamboo Sword*. Gavin Frew(tr.). 1981. Kodansha International.
松岡享子（作）・林明子（絵）. 1982.『おふろだいすき』福音館書店.

I Love to Take a Bath. Mia Lynn Perry(tr.). 2004. アールアイシー出版.

松本清張. 1971.『点と線』新潮文庫.

Points and Lines. Makiko Yamamoto and Paul C. Blum (tr.). 1986. Kodansha International.

三浦綾子. 1973.『塩狩峠』新潮文庫.

Shiokari Pass. Bill and Sheila Fearnehough(tr.). 1987. Tuttle Publishing.

宮沢賢治. 1996.『英語で読む銀河鉄道の夜』ロジャー・パルバース（訳）. ちくま文庫.

Night Train to the Stars. ジョン・ベスター（訳）. 1992. 講談社英語文庫.

渡辺茂男（作）・山本忠敬（絵）. 1963.『しょうぼうじどうしゃじぷた』福音館書店.

Jeeper the Fire Engine. Jaylene Mory and Susan Howlett(tr.). 2004. アールアイシー出版.

英語原文のもの

Allsburg, C.V. 1985. *The Polar Express*. Andersen Press.

『急行「北極号」』村上春樹（訳）. 2003. あすなろ書房.

Bean, J. 2007. *At Night*. Farrar, Strasu and Giroux.

『よぞらをみあげて』さくまゆみこ（訳）. 2009. ほるぷ出版.

Beskow, E. 1982. *Olle's Ski Trip* (English Translation by Forsell, K.) ラボ教育センター.

『ウッレと冬の森』おのでらゆりこ（訳）. 1981. らくだ出版.

Branley, F.B. (text) & Keller, H. (illustration). 1963. *Snow is Falling*. HarperCollins Publishers.

『あっ！　ゆきだ』高橋庸哉（訳）. 2008. 福音館書店.

Brown, D. 2003. *The Da Vinci Code*. Doubleday.

『ダ・ヴィンチ・コード（上）（中）（下）』越前敏弥（訳）. 2006. 角川文庫.
Burton, V.L. 1942. *The Little House*. Houghton Mifflin Company.
『ちいさいおうち』いしいももこ（訳）. 1965. 岩波書店.
Burton, V.L. 1999. *Choo Choo*. ラボ教育センター.
『いたずらきかんしゃ　ちゅうちゅう』むらおかはなこ（訳）. 1961. 福音館書店.
Buscaglia, L. 1982. *The Fall of Freddie the Leaf*. SLACK.
『葉っぱのフレディ』みらいなな（訳）. 1998. 童話屋.
Capote, T. 1989. *Breakfast at Tiffany's*. Reclam.
『ティファニーで朝食を』龍口直太郎（訳）. 1968. 新潮文庫.
Clancy, T. 1994. *Without Remorse*. Berkley Books.
『容赦なく（上）』村上博仁（訳）. 1996. 新潮文庫.
Connelly, M. 1993. *The Black Ice*. Warner Vison Books.
『ブラック・アイス』古沢嘉通（訳）. 1994. 扶桑社ミステリー.
Cook, T.H. 1995. *Breakheart Hill*. Quercus.
『夏草の記憶』芹沢恵（訳）. 1999. 文春文庫.
Cook, T.H. 2004. *Into the Web*. Bantam Books.
『蜘蛛の巣のなかへ』村松潔（訳）. 2005. 文春文庫.
Doyle, C. 1981. *The Adventures of Sherlock Holmes*. Penguin Books.
『シャーロック・ホームズの冒険』延原謙（訳）. 1953. 新潮文庫.
Egan, V.(text) & De Luca, D. (illustration) 2005. *Ben the Beaver*. McRae Books.
『ビーバーのベン』秋篠宮紀子（訳）. 2007. 新樹社.
Freeman, D. 1954. *Beady Bear*. Puffin Books.
『くまのビーディーくん』まつおかきょうこ（訳）. 2008. 偕成社.
Freeman, D. 1957. *Fly High Fly Low*. The Viking Press.
『とんで　とんで　サンフランシスコ』やましたはるお（訳）. 2005. BL出版.
Freeman, D. 1976. *Corduroy*. Puffin Books.

『くまのコールテンくん』まつおかきょうこ（訳）. 1975. 偕成社.

Gannett, R.S. (text) & Gannett, R.C. (illustration) 1977. *My Father's Dragon*. Yealing Books.

『エルマーのぼうけん』わたなべしげお（訳）. 1963. 福音館書店.

Gannett, R.S. (text) & Gannett, R.C. (illustration) 1977. *Elmer and the Dragon*. Yealing Books.

『エルマーとりゅう』わたなべしげお（訳）. 1977. 福音館書店.

Gannett, R.S. (text) & Gannett, R.C. (illustration) 1979. *The Dragons of Blueland*. Yealing Books.

『エルマーと 16 ぴきのりゅう』わたなべしげお（訳）. 1965. 福音館書店.

Hailey, A. 1966. *Hotel*. Bantam Books.

『ホテル（上）（下）』高橋豊（訳）. 1974. 新潮文庫.

Hailey, A. 1976. *The Money Changers*. Bantam Books.

『マネーチェンジャーズ（上）（下）』永井淳（訳）. 1978. 新潮文庫.

James, P.D. 1989. *Devices and Desires*. Faber and Faber.

『策謀と欲望（上）（下）』青木久恵（訳）. 1999. ハヤカワ文庫.

Keats, E.J. 1976. *The Snowy Day*. Puffin Books.

『ゆきのひ』きじまはじめ（訳）. 1969. 偕成社.

Keller, H. 1989. *The Best Present*. Greenwillow Books.

『いちばんすてきなプレゼント』あかぎかんこ・あかぎかずまさ（訳）. 2001. ポプラ社.

Keller, H. 1996. *Geraldine First*. Greenwillow Books.

『ジェラルディンとおとうとウィリー』eq Press（訳）. 1996. 国土社.

Keller, H. 1998. *Brave Horace*. Greenwillow Books.

『かいじゅうなんかこわくない』すえよしあきこ（訳）. 2002. BL 出版.

Keller, H. 2002. *Farfallina & Marcel*. Greenwillow Books.

『ファルファリーナとマルセル』河野一郎（訳）. 2006. 岩波書店.

Knudsen, M. (text) & Hawkes, K. (illustration). 2006. *Library Lion*. Candlewick Press.

『としょかんライオン』福本友美子（訳）. 2007. 岩崎書店.
Lionni, L. 1963. *Swimmy*. Dragonfly Books. Alfred A. Knoph.
『スイミー』谷川俊太郎（訳）. 1969. 好学社.
Lionni, L. 1969. *Alexander and the Wind-Up Mouse*. Alfred A. Knoph.
『アレクサンダとぜんまいねずみ』谷川俊太郎（訳）. 1975. 好学社.
London, S.(text) & Arnold, A. (illustration). 1997. *Firehorse Max*. HarperCollins.
『しょうぼう馬のマックス』江國香織（訳）. 1998. 岩波書店.
Lucas, D. 2005. *Nutmeg*. Alfred A. Knopf.
『ナツメグとまほうのスプーン』なかがわちひろ（訳）. 2006. 偕成社.
Lucas, D. 2006. *Whale*. Alfred A. Knopf.
『くじらのうた』なかがわちひろ（訳）. 2007. 偕成社.
Lucuas, D. 2008. *The Lying Carpet*. Andersen Press.
『ほらふきじゅうたん』なかがわちひろ（訳）. 2009. 偕成社.
Maugham, W.S. 1999. *The Moon and Sixpence*. Vintage Books.
『月と六ペンス』中野好夫（訳）. 1959. 新潮文庫.
McCloskey, R. 1941. *Make Way for Ducklings*. The Viking Press.
『かもさんおとおり』わたなべしげお（訳）. 1965. 福音館書店.
Mcghee, A.(text) & Reynolds, P.H.(illustration). 2007. *Someday*. Atheneum Books.
『ちいさなあなたへ』なかがわちひろ（訳）. 2008. 主婦の友社.
Montgomery, L.M. 1992. *Anne of Green Gables*. Yearling Classic.
『赤毛のアン』村岡花子（訳）（村岡美枝（補訳））. 2008. 新潮文庫.
Murphy, M. 2001. *Koala and the Flower*. Roaring Brook Press.
『コアラとお花』ひだかみよこ（訳）. 2001. ポプラ社.
Rey, H.A. 1941. *Curious George*. Houghton Mifflin Company.
『ひとまねこざるときいろいぼうし』光吉夏弥（訳）. 1966. 岩波書店.
Rey, H.A. 1947. *Curious George Takes a Job*. Houghton Mifflin Company.
『ひとまねこざる』光吉夏弥（訳）. 1983. 岩波書店.

Sendak, M. 1963. *Where the Wild Things Are*. Harper Collins.
『かいじゅうたちのいるところ』じんぐうてるお（訳）. 1975. 富山房.

Sillitoe, A. 1987. *The Loneliness of the Long-Distance Runner*. Vintage Books.
『長距離走者の孤独』丸谷才一／河野一郎（訳）. 1973. 新潮文庫.

Steig, W. 2003. *When Everybody Wore a Hat*. HarperCollins.
『みんなぼうしをかぶってた』木坂涼（訳）. 2004. セーラー出版.

Steig, W. 2005. *Sylvester and the Magic Pebble*. Simon and Schuster.
『ロバのシルベスターとまほうの小石』せたていじ（訳）. 2006. 評論社.

Trivizas, E. (text) & Oxenbury, H. (illustration). 1993.
The Three Little Wolves and the Big Bad Pig. Aladdin Paperbacks.
『３びきのかわいいオオカミ』こだまともこ（訳）. 1994. 富山房.

Varley, S. 1984. *Badger's Parting Gifts*. Lothrop, Lee & Shepard Books.
『わすれられないおくりもの』小川仁央（訳）. 1986. 評論社.

Williams, V.B. 1982. *A Chair for My Mother*. Greenwillow Books.
『かあさんのいす』佐野洋子（訳）. 1984. あかね書房.

Zion, G. (text) & Graham, M.B. (illustration). 1956. *Harry the Dirty Dog*. HarperCollins.
『どろんこハリー』わたなべしげお（訳）. 1964. 福音館書店.

Zolotow, C. (text) & Craig, H. (illustration). 1987. *The Bunny Who Found Easter*. Houghton Mifflin Company.
『うさぎの　だいじな　みつけもの』松井るり子（訳）. 1998. ほるぷ出版.